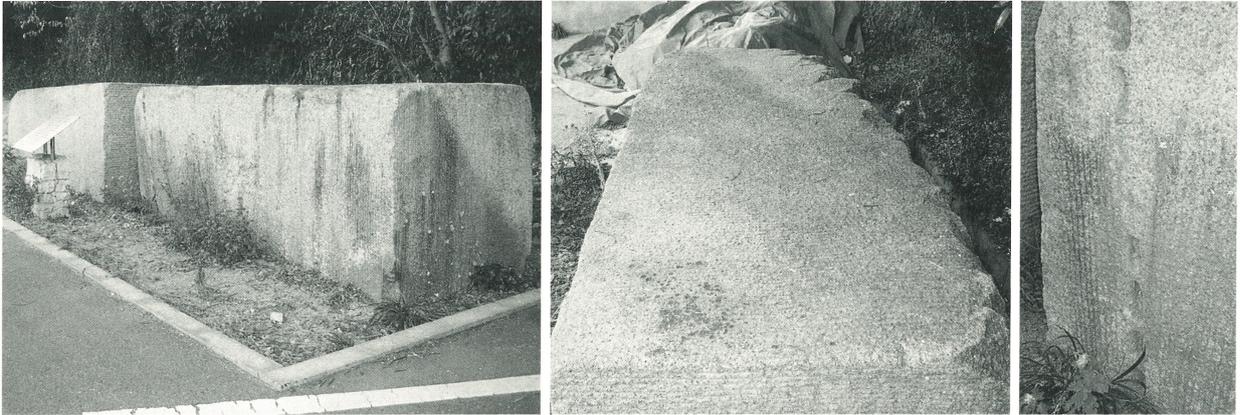


第1図 石のふるさと〔森岡・坂田編2005〕

期工事が寛永元年（1624）に、第3期工事が寛永5年（1628）に着手され、ほぼ継続して工事が実施されたものと考えられる。これらの諸工事は「天下普請」で行われ、豊臣氏に連なる西国大名を中心に計63藩64家の大名が動員されている〔森岡編1998〕。

徳川大坂城の石垣には大量の切石が用いられており、その総数は200万とも400万とも言われている。石材の多くは花崗岩であり〔小倉2005〕、伏見城の石材が再利用されたほか、西国各地の採石場から多くの石材が切り出され、大坂まで運ばれている。主要な採石場としては、香川県・岡山県や山口県に広がる瀬戸内海島嶼部、大阪府と奈良県の県境に位置する生駒山、京都府と奈良県の境である加茂・笠置地域とともに、今回報告する東六甲採石場が挙げられる〔岡本1983〕（第1図）。瀬戸内海島嶼部では、国史跡大坂城石垣石切丁場跡〔内海町教委編1979〕をはじめとする多くの丁場が点在する香川県小豆島（江戸時代は幕府領）や、丁場が「大坂城築城残石群」として観光スポットになっている瀬戸内市牛窓町前島、大坂城とともに池田忠継・忠雄期に改築された岡山城の石垣用石材を採取したことで知られる岡山市犬島、岡山県と香川県に挟まれた備讃瀬戸に位置する塩飽諸島などがある。これらの島々で産出する領家帯花崗岩は、斜長石を含む白っぽい良質の石材である。

ところで、兵庫県たつの市御津町の室津海岸では、昭和47年（1972）の漁港改修時に石垣用石材が海中から引き上げられている（第2図）。現在室通港に保存されている石材は、ほぼ直方体の花崗岩2石で、表面に大量にフジツボが付着しているが、一見して領家帯花崗岩とわかる目の細かい白色の花崗岩である（第2図）。室津は古代から天然の良港として知られる「室の泊」であり、これらの石材は大坂城へ運ぶ途中に何らかの理由で海中に没したものと考えられ、瀬戸内の島々から船によって運ばれた石材の実態を伝える貴重な資料である。両石材の小口面は125～145cm四方、奥行きは390～400cmを測るものであり、本来は隅石（角石）とするために切り出されたものであろう。表面はノミによるスタレ彫りで平滑に調整され、ほぼ完成した状態の石材である。なお、一方の石材には割裁されていない矢穴列がある。この矢穴列は小口面から約30cm（1尺）の位置にあり、現在の設置状態で上側の3個と下側の5個が完成したものであり、その間に矢穴を彫り始めて途中で中止した痕跡が2つ認められる。矢穴口の法量は



第2図 室津の石垣用石材 ノミ調整や矢穴が確認できる

10～13cm×4.5cmのAタイプで、各矢穴の間隔は3～4cmである。最下部の矢穴は直交する割面で割り取られているので、石材を切り出す段階で計画の変更があり、中断した矢穴列を残したまま石材が加工され、積み出されたようである。ここでも解説板には「豊臣秀吉が大坂城を築いた時」と記されているが、徳川大坂城築城時のものであることは明らかである（2006年1月に現地を確認）。

ところで、東六甲採石場で採取できる花崗岩は、カリ長石が淡い桃色を呈することから俗に「ピンク花崗岩」と呼ばれる花崗岩であり、幕府領小豆島などの東部瀬戸内海島嶼部や生駒山で産出される領家帯花崗岩とは明らかに色調が異なる。現存する徳川大坂城の石垣を見る限り、主たる石材は花崗岩であり、その中でも圧倒的に多いのは「ピンク花崗岩」である。東六甲以外に「ピンク花崗岩」を産出する地域としては、西部瀬戸内海島嶼部が挙げられるが、大坂からの距離を考えた場合、この地域を主たる産地とすることは難しいであろう。また、岡山市域で産出する「万成石」も「ピンク花崗岩」であり、様々な石製品に加工されているが、その採石・加工・流通の開始が近世後期に下ることであるので（2006年2月に乗岡実氏から御教示いただいた）、やはり「万成石」も徳川大坂城の主たる石垣用石材とすることはできない。よって、必然的に、徳川大坂城の「ピンク花崗岩」の主たる産地と成り得るのは東六甲採石場だけということになり、東六甲採石場から大坂城石垣を築いている石材の半数以上が運ばれたと考えられるのである。

この東六甲採石場は、西宮市から神戸市にかけて東西に伸びる六甲山の南東端部の南向き斜面に位置し、大阪湾を望むことができる。その範囲は、西宮市から神戸市東灘区に至る東西6.5km、南北1.5kmである。現在確認されている採石場はおおよそ標高40mから300m程度の急傾斜地であり、大坂城からは直線距離にして約20kmの近距離であるので、採石場から石材の終着点である大坂城が視認できたであろう。採石場で切り出された石材は、六甲山地の開析谷や小河川を使って海岸部まで引き下ろされ、そこで船に積み込まれて大坂まで運ばれたと考えられる。ちなみに、採石場から海岸までの距離は2～3kmで、海上を運ばれた距離は十数kmである。大坂側では、淀川の支流である大川沿いの京橋口や、法円坂のすぐ南に位置する龍造寺町、旧大和川河口付近に、刻印を伴う花崗岩がまとまって出土している地点が何ヶ所か知られており、石材の荷揚げ場と考えられている。大坂に運ばれた石材は、舟運を利用して石垣普請丁場のすぐそばまで搬入されたようである〔藤井1994、黒田慶一氏の御教示による〕。

現在、東六甲採石場は、割石をはじめとする関連石材の分布密度や刻印の種類を勘案し、山塊・尾根筋や河川を境にして6群に分けられている。東から、「甲山刻印群」・「北山刻印群」・「越木岩刻印群」・

「岩ヶ平刻印群」・「奥山刻印群」・「城山刻印群」と呼称しており（第4図）、今回報告する発掘調査地点は「岩ヶ平刻印群」に含まれる。この刻印群では多様な刻印が確認されており、刻印の密集度も東六甲採石場の中で最も高い。ここでは、「大坂城普請丁場割図」と大坂城にみられる石垣刻印の照合や、岩ヶ平刻印群における刻印の偏在性から、熊本藩加藤家や唐津藩寺澤家、鳥取藩池田家、松江藩堀尾家、小浜藩京極家の採石場が分布していた可能性が推測されている〔古川編2003〕。また、発掘調査によって採石に関わる多様な遺構が検出されるようになっており、徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群第66地点で実施された発掘調査では採石土坑や掘立柱建物跡が検出されている〔古川編2003〕。今回の発掘調査と併行して実施された徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群第84地点における発掘調査では、大規模な谷に集中的に展開する丁場やテラス面を構築している丁場が検出されている〔森岡・坂田編2005〕。このほか、特徴的な遺構として、採石道具の補修用の小鍛冶炉と考えられる炭・焼土や炉壁を伴う土坑が、先述した東六甲採石場岩ヶ平刻群第66地点と第84地点で確認されており、羽口や鉄滓の出土も見られる。このような小鍛冶炉の例は、今回の発掘調査地点から北東に60m程の位置にある八十塚古墳群第108地点においても新たに確認されている〔芦屋市教委2006〕。今のところ、このような小鍛冶炉はほとんど川以東のみで検出されているにすぎないが、今後同様の遺構がどどん川より西側においても発見される可能性は高まっていると言えよう。

さらに、この刻印群では宮川や夙川およびその支流が石材の搬出ルートとして活用されたことが推察されている。実際、宮川下流域では、江戸時代の海岸付近と推定される呉川遺跡や西蔵町において、刻印を有する調整石ないし準調整石が複数出土しており、この付近に石材の集積場があったことを示す具体的な証拠が得られるようになってきている〔森岡・坂田編2005〕。



第3図 西蔵町出土の石垣用石材
「〇」「大」の刻印が見られる

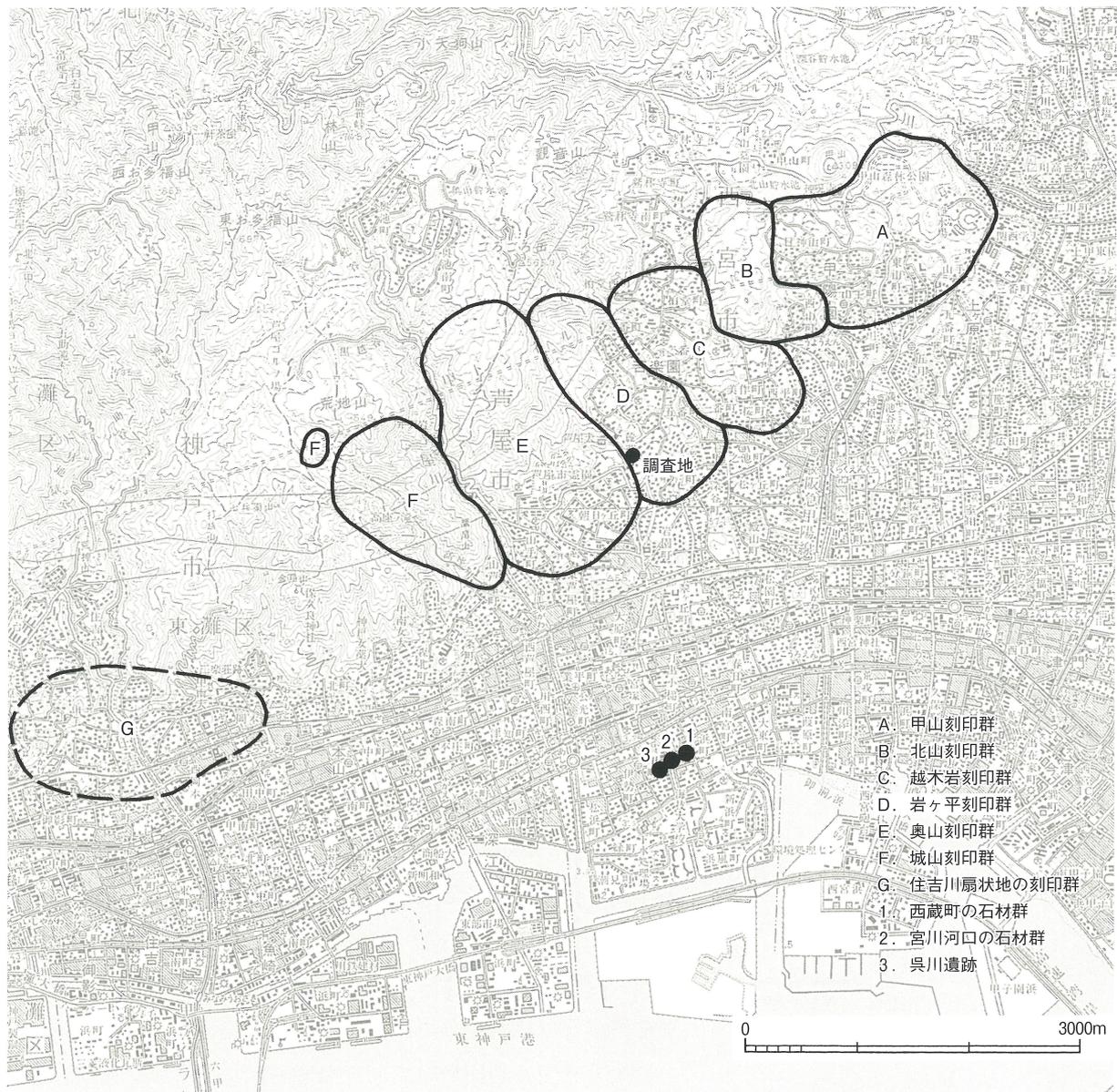
西蔵町72番地では、2005年秋に、共同住宅の建設工事に伴って関連石材が検出された。当該地は宮川左岸にあり、近接する宮川河床にも、いくつかの割石が点在している。当該地で出土した石材は、現地表下1.5~2.5mで確認されたものであるが、フジツボなどの付着がないことから、川底や海中に没していたものではなく、地上部分に置かれていたものと推定される。検出した石材は合計5石で、このうちの3石がAタイプの矢穴痕をもつ割石（調整石）であった（第3図）。これらの割石には、「〇」「大」などの刻印が認められる。その他に、Aタイプの矢穴痕をもつ割石1石（端石）と、表面にノミ調整を施した石材1石も確認されている。

このように、徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群（岩ヶ平石切丁場跡）については、具体的な採石工人集団の形態や所属は不明であるものの、天下普請に動員された相当数の大名が、この地において石材を調達していた様相が徐々に明らかになりつつあるのである。（白谷朋世）

第2節 徳川大坂城東六甲採石場に関する調査と研究

(1) 既往の調査・研究

徳川大坂城東六甲採石場は、西宮市の仁川右岸から芦屋市、神戸市東灘区の東端に至る東西約6.5kmの範囲に分布しており、地形的には山地および丘陵・台地に立地している（第4・15・16図、巻頭図版1、図版1）。当採石場は地形や刻印石の分布状況から、さらに甲山刻印群・北山刻印群・越木岩刻印群・岩ヶ平刻印群・奥山刻印群・城山刻印群の6群に細分されている。また、神戸市東灘区所在の郡家遺跡（岸本地区）〔口野1988〕や住吉宮町遺跡（神戸市教育委員会平成17年度発掘調査資料）において採石遺構が検出されたことや、神戸市東部の市街地において刻印や矢穴（痕）をもつ石材が認められること（藤川祐作氏の御教示）〔森岡・坂田編2005〕から、神戸市灘区付近まで分布範囲が広がる可能性が高い（第4図G. 住吉川扇状地の刻印群）。



第4図 徳川大坂城東六甲採石場における刻印群の分布 1/62500（〔森岡・竹村編2006〕から、一部改変）

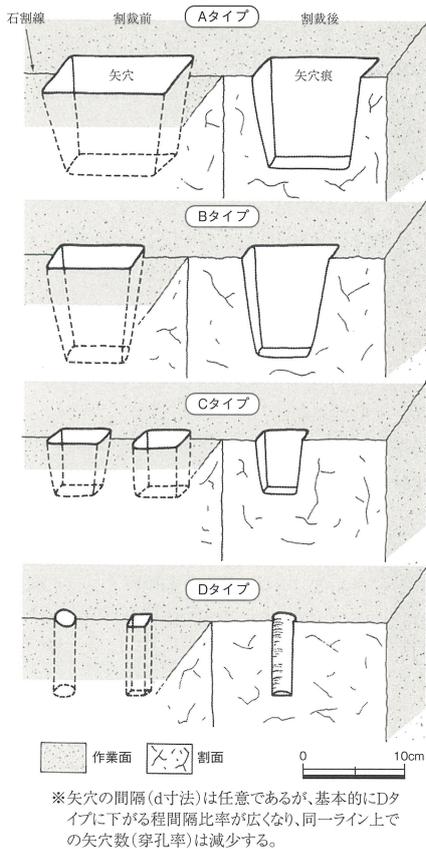
本節では、徳川大坂城東六甲採石場における既往調査とそれに関する研究について、今回の発掘調査地である岩ヶ平刻印群を中心として記述する。なお、森岡秀人氏は、本採石場の調査・研究について、数段階の画期を設定して詳述している〔森岡2003 a・b〕。

① 刻印石の分布調査と徳川大坂城東六甲採石場・刻印群の分布範囲の設定

当採石場の調査や研究における特徴として、民間の歴史研究団体である芦の芽グループによって刻印石が発見され、それ以降も当グループや在野の研究者による調査・研究が行政とは別に進められてきた経緯がある。芦の芽グループとは、市立山手中学校歴史研究部の卒業生が母体となり、弥生時代の高地性集落として著名な会下山遺跡（本市三条町所在）における昭和30年代の学術調査への参加を契機に発足した地域史研究団体であり、発足以降、精力的に芦屋市内の文化財保護に取り組んできた。

昭和43年（1968）に芦の芽グループ会員である小倉幸一氏が、芦屋市内の六甲山中にあった野外活動センター内で刻印石を発見した。それ以降、当グループによる分布調査が継続して実施され、その成果は徳川大坂城東六甲採石場の分布範囲の把握と前記の6刻印群の設定として一つの到達点を示した〔藤川1972・1979〕。

その際、藤川祐作氏によって、刻印石の類型と規模・形態による矢穴の類型が提示された。前者では刻印をもつ石材でも、自然石・矢穴石・割石・調整石が存在することや、刻印が彫られる面が自然面である場合と割面である場合があることが明示されている。後者では、矢穴の型式としてA・B・Cタイプが設定され、そのなかでも大型のAタイプが徳川大坂城に伴う矢穴であることが明らかにされている。



第5図 矢穴の基本型式分類模式図
〔森岡・坂田編2005〕から、一部改変

徳川大坂城築造期の矢穴型式が把握されたことによって、刻印を伴わない場合でもAタイプ矢穴（痕）さえ伴えば、当該時期の石材であることを確定できるようになったのである。また、この時点で矢穴の形状・規模・手法・相互の間隔についての記載法がみられ、矢穴における考古学的な観察・記録をする上で最も有効な属性がすでに指摘されている。

なお、矢穴型式では、その後、森岡秀人氏が小型の矢穴であるCタイプにおいて、より小型のもの（3cm未満）や円錐状を呈するものを、明確に近現代に下る矢穴であると判断して、Dタイプとして区別している（第5図）〔森岡1998 a、森岡・坂田編2005〕。

② 周知の埋蔵文化財包蔵地としての取り扱い

その後も芦の芽グループの藤川祐作氏や古川久雄氏によって、刻印石の詳細な分布調査が続けられた。一方で、本市教育委員会では、昭和54年（1979）に、芦の芽グループの全面的協力を得て、国庫補助事業による遺跡詳細分布調査を実施し、その成果を遺跡分布地図として公表した〔森岡編1980〕。

遺跡分布図に刻印群の範囲が明示されたことは、同時に刻印群やそれを構成する関連石材が埋蔵文化財（包蔵地）として周

知されたことを意味し、その結果、文化財保護法における遺跡保護の対象となった。しかし、この時点では遺跡保護といっても未だ発掘調査の対象とはなっておらず、分布調査や工事立会などで刻印石や関連石材が新たに確認されるに止まっている（第2～9表）。しかし、近世城郭の採石場が「周知の埋蔵文化財包蔵地」として取り扱われるようになった全国初の遺跡であると考えられ〔森岡2003 a・b〕、非常に画期的であった。

その後も、遺跡分布地図が改定される度に、藤川祐作氏をはじめとする芦の芽グループや摂陽文化財研究所の古川久雄氏、本市教育委員会の分布調査によって新たに確認された刻印石や関連石材の位置が新規登録されている〔森岡編1988、森岡・和田・白谷編1993、森岡・竹村編2001〕。

③ 関連石材を対象とした発掘調査

昭和63年（1988）には、発掘調査によって初めて関連石材が検出された。それは八十塚古墳群第47地点（岩ヶ平支群第10号墳）の発掘調査において、設定されたトレンチから検出されたAタイプ矢穴痕をもつ割石である。その際、当石材は採石土坑に伴うものと理解された〔古川編1990〕。その後、平成17年（2005）に同敷地で実施された八十塚古墳群第105地点の調査によって、さらに当石材の周辺からも割石が検出され、関連石材は合計9石となった。この調査結果では、これらの石材が土坑に伴うものではなく、谷地形で行われた採石活動の痕跡であることが明らかになった（当調査の報告書は平成18年に刊行を予定）。昭和63年（1988）当時の限られたトレンチ調査の中で、遺構の性格を検討するのは非常に困難であったと考えられるが、それ以上に関連石材が地表面に露出しているものだけでなく、地下にも埋没していることが認識されたことが何より大きな成果であった。岩ヶ平刻印群が八十塚古墳群の分布と重複していたという特色が、採石遺構の発掘調査につながったとすることができる。

平成5年（1993）に実施された古墳推定地における岩ヶ平刻印群第13地点の確認調査では、古墳状隆起は古墳ではなかったが、その一方で、東六甲採石場に伴う多数の関連石材が検出され、埋没していた刻印も検出された。当調査の成果は報告書として公開されたが〔森岡・白谷編1994〕、それは徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群の調査成果が単独で収載された初めての報告書となった。さらに、当報告書では、それまで調査・研究対象の中心だった刻印石ばかりでなく、採石の痕跡である矢穴や矢穴痕を残した石材を詳細に記録・報告し、さらに当時の採石工程を検討したものとして評価される。

ただし、この段階では、発掘調査の対象は地表面に視認できる石材に限られ、現在のように、その間に埋没している石材や遺構を確認し、調査・記録の対象とするまでには至っていない。このような地表面に露出している石材を主な対象とした小規模な発掘調査は、その後、平成5年（1993）に実施された奥山刻印群分布範囲内に位置する芦屋墓園拡張工事に伴う事前調査〔森岡編1998〕や、阪神・淡路大震災以降に個人住宅の建設等に伴う事前調査として実施された、岩ヶ平刻印群第32・33・45・59・67・70・79・81・91地点などが挙げられる（第9・10図）〔古川編2002、森岡・竹村編2006〕。

④ 岩ヶ平刻印群における全面発掘調査

岩ヶ平刻印群が分布する芦屋市六麓荘町・岩園町では、上記のとおり個人住宅建設に伴う小規模な発掘調査が行われてきたが、平成14年（2002）以降、調査面積が1000㎡を超えるような大規模な発掘調査が3件実施された（岩ヶ平刻印群第66・84・85地点）。第66地点は平成14年に実施された六麓荘浄水場の施設建設に伴う本発掘調査で、約3000㎡を地形測量し、その内の約1200㎡が全面調査された。その結



第6図 岩ヶ平刻印群(第66地点)で検出された掘立柱建物

果、唐津藩寺澤家所用の「フ」刻印をもつ石材が1石確認され、周辺刻印石のあり方をも考慮して当藩の石切丁場であることが明らかとなった。また、当時の採石工程を検討できる採石遺構（石材群・採石土坑など）も数多く確認された。さらに、石切丁場に伴う掘立柱建物や鍛冶炉が検出された(第6図)〔古川編2003〕。

第84地点は、平成16年(2004)に岩園町の造成工事に伴い実施されたものであるが、開発面積が25000㎡を越すもので、調査面積は約2540㎡となった〔森岡・坂田編2005〕。開発面積に対して調査面積が1割程度と全面調査には至っていないが、多数の関連石材や多様な類型に分けられる丁場、炉跡、石曳道などが確認された。

残る第85地点は今回発掘調査した地点で、詳細は第4章で報告するが、調査面積は約1460㎡に達し、長州藩毛利家石切丁場における採石活動が明らかとなった。

これらの大規模な調査において、当時の石切丁場における採石活動が視覚的に把握されたことによって、関連石材をはじめとする採石遺構に対する認識が短期間ながら飛躍的に高まった。これ以後、これまで個々に調査されてきた石材を有機的に結びつけて解釈することが可能となった。さらに、これまで精力的に行われてきた刻印の分布把握とは別に、当時の採石技術や方法を検討する気運が高まった。それは、〔古川編2003、森岡・坂田編2005、森岡・竹村編2006〕で詳細に検討されている(第7図)。そして、本書の作成においても、採石技術や工程を意識したものとなっている。〔古川編2003〕では、考古学的な記録や考察ばかりでなく、文献、岩石学、自然科学分析など、様々な視点から学際的な検討が行われている。

また、これらの発掘調査は、研究者を対象としても現地公開され、研究者の間でも本採石場の重要性が徐々に認識された。

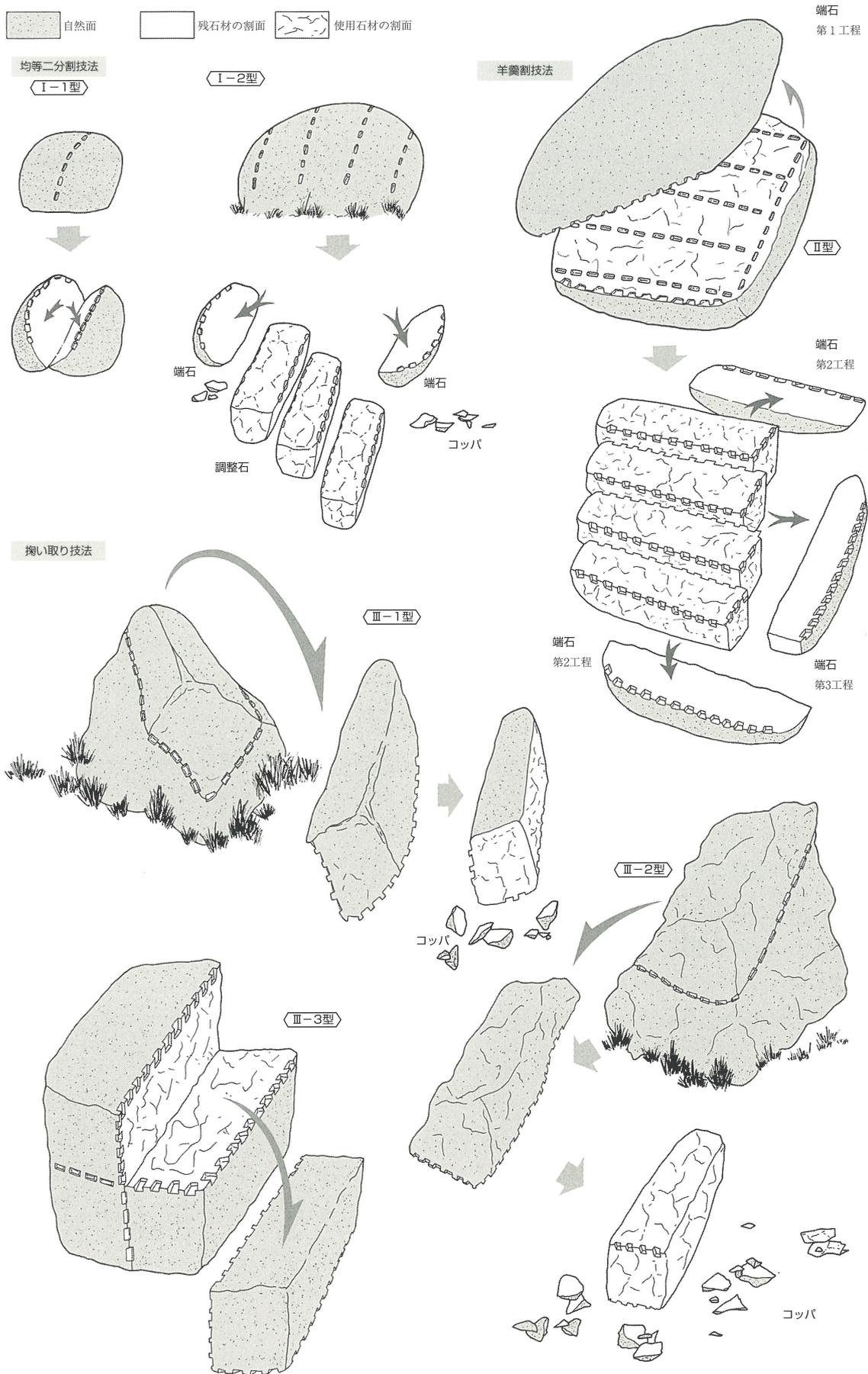
なお、大規模な調査ではないが、芦屋学園の造成工事に伴い平成11年(1999)に実施された岩ヶ平刻印群第46地点の調査においても、採石工程が大変良くわかる石材・遺構が検出されている。

⑤ 採石丁場割の推定

当時の採石技術や工程についての考察が積極的になされ始めたが、その一方で、刻印石の発見以降、精力的に行われてきた刻印の分布調査・研究も一つの到達点を迎えた。それは、古川久雄氏による岩ヶ平刻印群における採石大名とその採石領域の推定である〔古川2003a〕。

これまでも徳川大坂城の石垣に認められる刻印種との照合から、本採石場における刻印種がどの採石大名・採石藩所用のものなのかが明らかにされ、一藩占有タイプの刻印群ではいずれの藩の石切丁場であるのかが示されてきた〔藤川1972・1979など〕。しかし、岩ヶ平刻印群は複数の採石大名の刻印の分布が認められ、複数の藩が入り組んで採石を行っていると考えられてきた。すでに、〔森岡・白谷編1994〕においても、その時点で確認されていた刻印種の分布について検討がなされているが、採石領域を推定するまでには至っていない。

その後、芦の芽グループや古川久雄氏、芦屋市教育委員会が調査した当刻印群に帰属する刻印の拓影およびその詳細な内容の集成が公表され〔古川2002・2003a〕、同時に古川氏によって採石領域の推定



第7図 調整石生成工程の諸類型模式図〔森岡・坂田2005c〕



第8図 芦屋市指定文化財第8号 徳川大坂城
毛利家採石場出土刻印石（芦屋墓園内）

が行われた〔古川2003 a〕。それ以降も新たな刻印が検出されているが、古川氏の推定領域とはほぼ整合性を保っており、氏の推定領域の蓋然性は高いものと考えられる。ただし、今回の調査地点においては、〔古川2003〕では小浜藩京極家の採石領域に含まれているにもかかわらず、調査の結果、長州藩毛利家の領域であったことが明らかとなった。この齟齬は古川氏が長背尾根の稜線を採石領域の境界と推定したが、実際には当時の丁場範囲が形成される際に石材を搬出するルートが重視されていたことに起

因すると考えられる。この問題については、本書第5章第1節で検討する。

⑥ 市文化財に指定

本市では、市にふさわしい文化財について、教育委員会の諮問により、芦屋市文化財保護審議会が学術上の調査・審議を経て答申したものを、教育委員会が市文化財として指定する。この市指定文化財については、平成7年（1995）の阪神・淡路大震災以降、しばらく審議される状況ではなかったが、震災復興が進捗した平成16年（2004）によようやく再開された。その際、発掘調査によってその重要性が明らかとなってきた徳川大坂城東六甲採石場が指定候補として取り上げられた。文化財保護審議会の中では採石場跡としての面的な指定についても議論されたが、最終的には芦屋墓園内に保存されている長州藩毛利家所用の刻印をもつ石材が市文化財として指定された（第8図）。このことは、日刊紙数社や『広報あしや』（芦屋市広報課2004）にも掲載され、市民に文化財としての重要性を周知させることとなった。

⑦ 城郭・石切丁場研究における東六甲採石場の役割

長らく、本採石場の調査・研究成果の共有は本市をはじめとする地域史の中におさまっている状態であったが、それとは別に、近年、全国的に近世城郭に伴う石垣用石材の石切丁場が注目されはじめた。そのような中、石垣普請や石切丁場をテーマにした研究会やシンポジウムが開催され、東六甲採石場も取り上げられた〔森岡2003 b・2005 b、古川2004〕。

また、岩ヶ平刻印群第84地点では、市民や学会をはじめとする各種研究会による保存運動が巻き起こった〔森岡・坂田編2005〕。その内容は日刊紙数社により記事にされ、また、シンポジウムも開催された〔大阪歴史学会編2005〕。この保存運動は、本採石場跡の重要性を市民や学会、研究者に広く知らせる大きな契機となった。そして、本採石場の埋蔵文化財としての取り扱いについて行政的にも注目させることにつながった。

このように、近年、東六甲採石場は全国的にも注目される近世城郭の石切丁場の標識的な遺跡と認識されつつある。

⑧ 徳川大坂城東六甲採石場調査研究検討会の開催

兵庫県教育委員会では、徳川大坂城東六甲採石場調査研究検討会を平成17年度から開催することとなった。これは、兵庫県教育委員会が、文化庁並びに学識者の助言を得ながら、西宮市教育委員会・芦

屋市教育委員会・神戸市教育委員会・宝塚市教育委員会とともに、徳川大坂城東六甲採石場について、多方面の検討を加え、埋蔵文化財保護行政に資する検討を行うことを目的としている。今後の調査・検討を経て、有意義な成果が公表されることが期待される。

⑨ 海浜部における関連石材の検出

採石場とは別に、江戸時代の海岸付近にあたる本市呉川町では、六甲山中から切り出され、浜出しのために海浜部に集積されたものと考えられる刻印石と割石が合計9石、道路工事に伴い出土した〔藤川1991、森岡・古川1992〕。その後、これらの石材の不時発見を根拠として、「呉川遺跡」が周知の埋蔵文化財として新規に設定された〔森岡・和田・白谷編1993〕。なお、これらの石材は、現在、芦屋市立美術博物館の前庭に現代彫刻作品に含まれたモニュメントとして移設保存されている〔芦屋市美博1991 a～c〕。また、平成4年（1992）には同遺跡において、都市計画道路中央道の建設工事に伴って刻印石や割石が出土した〔森岡1998 c〕。これらの石材は、現在、中央道の歩道において移設展示されている。

さらに、平成13年（2001）には、芦屋市立美術博物館学芸員（当時）の和田秀寿氏と芦の芽グループの藤川祐作氏によって、呉川遺跡から約150m東を流れる宮川河口の河床においてAタイプ矢穴痕をもつ石材数石が発見された。そして、平成17年（2005）には、この宮川河床にみられる石材が分布する地点からすぐ東隣に位置する西蔵町72番地における共同住宅建設工事に伴う工事立会で、刻印を有する石材3石を含む関連石材が合計5石出土した〔森岡・坂田2005 c〕。

これら呉川遺跡や宮川河口付近、西蔵町でみつかった石材は、先述したとおり、六甲山中から切り出され、船に積み込まれるために海浜部に持ち運ばれたものと考えられる。このような遺構は、当地域をはじめ、東六甲採石場南方の海浜部に数多く埋没しているものと推測され、今後も埋蔵文化財包蔵地範囲外において建設工事中に未周知の石材や遺構が不時発見される可能性が高い。

これらの石材には東六甲採石場と共通する刻印を有するものが多く認められ、山中における石切から山出し、海浜部から本丁場である大坂城に向けた浜出しの過程を検討する上で、大変重要な資料である〔森岡・坂田2005 c、森岡2006〕。

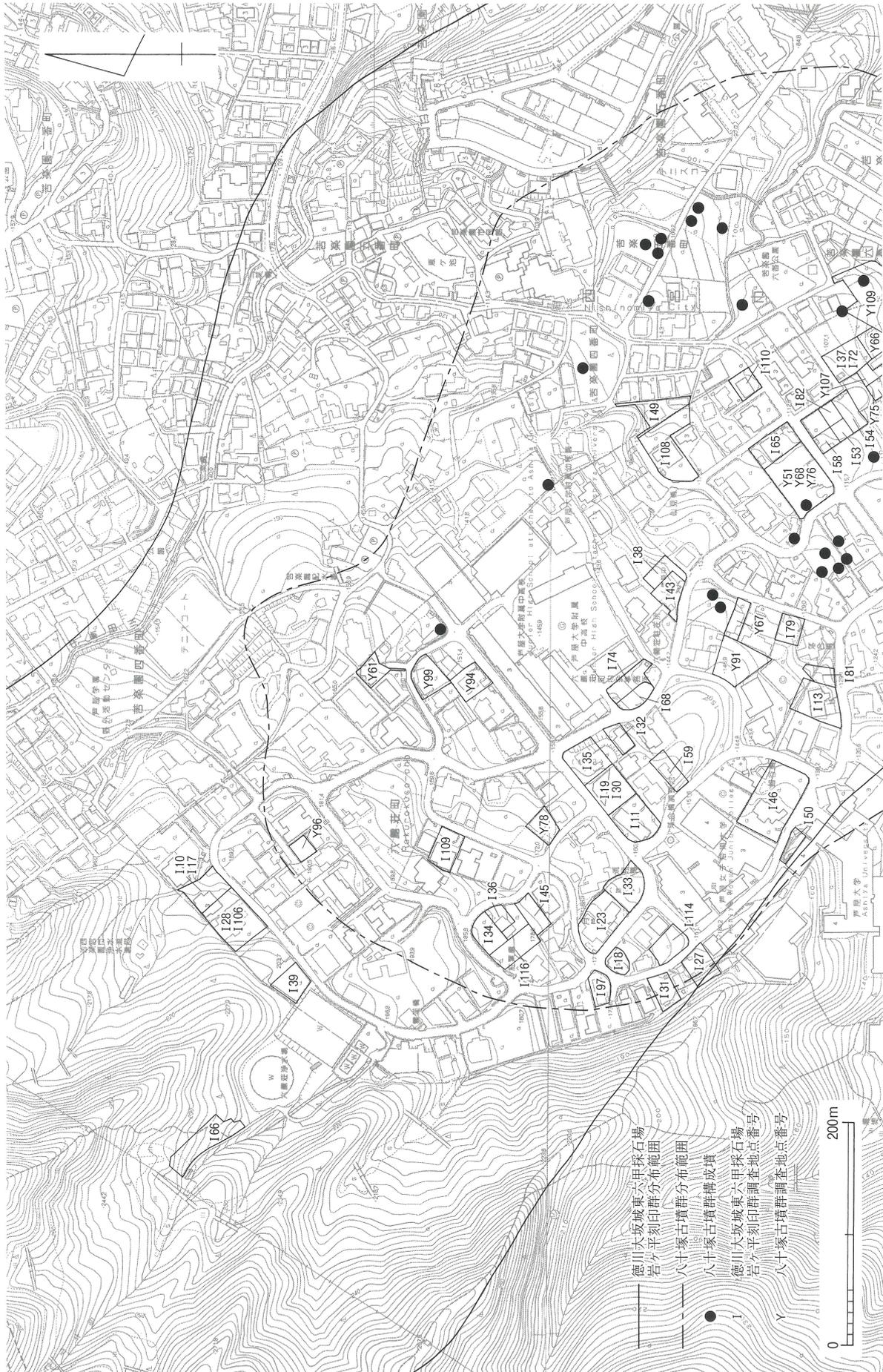
（竹村忠洋）

（2）今後の調査・研究および石材の保存方法

前項では、本採石場における刻印石の発見から現在に至るまでの調査や研究を簡単にまとめたが、先に触れたとおり、本採石場の調査・研究における大きな特色は、その多くが芦の芽グループの藤川祐作氏、摂陽文化財研究所の古川久雄氏をはじめとする在野の研究者によって行われてきたことである。そして、刻印石の分布調査から導き出された成果は、遺構として残る石切丁場がどの採石大名に帰属するものであるかを解明するまでに至っている。

平成5年（1993）以降は、芦屋市教育委員会が調査主体となって、個人住宅の建設を中心とする開発に伴う事前調査が実施されるようになったが、これによって地表面に露出した刻印石や関連石材を点として把握していた段階から、当時の採石痕跡を遺構面として面的に検証できる段階に飛躍した。そして、今後は、在野の研究者と本市教育委員会が積極的に協働して、徳川大坂城東六甲採石場について多角的に調査・研究していくのが望ましいと考える。

また、本採石場における採石技術や方法についての研究は、発掘調査が実施されるようになってようやく検討が行われはじめたが〔森岡・白谷編1994、森岡編1998、古川編2002・2003、森岡・坂田編2005、



第9図 徳川大坂城東六甲採石場ヶ平刻印群および八十塚古墳群調査地点分布図 (1) 1 / 5000

第2表 徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群調査地点一覧表(1)

(2005年12月31日現在)

調査地点	所在地	調査種別	調査年月	調査所見	石材・遺構	保存状況	文献・備考
1	六麓荘町6-5	工事立会	1985.06	刻印石を含む石材を確認。	刻印石、石材	消滅	〔森岡1988 i〕
2	六麓荘町132-1	工事立会	1985.01	敷地北東端の石垣に徳川大坂城東六甲採石場に伴う石材が確認された。	石材	石垣として現状保存	〔森岡1988 g〕
3	岩園町167・168	-	1986.07	中世流出包含層確認。	-	-	-
4	六麓荘町142	-	1988.01	刻印石1石と石材2石を確認。その後、工事立会で刻印石を1石確認。	刻印石2石、石材2石	現地保存	〔古川1988〕
5	岩園町	-	1989.03	洪積層の変化と旧地形を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
6	朝日ヶ丘町1-1・2、2,3,4-1	工事立会	1989.08	洪積層変化部の確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
7	六麓荘町113-1・2	工事立会	1989.09	刻印石3石確認。矢穴石・割石11石確認。	刻印石3石、石材11石	現地保存	〔古川編2003〕では岩ヶ平刻印群第2次調査としている。
8	六麓荘町77	工事立会	1990.06	北側石垣部分を工事立会。東部で刻印石3石を確認。	刻印石3石	-	-
9	六麓荘町76-1	確認調査	1990.06	刻印石4石を確認。	刻印石4石	-	-
10	六麓荘町2	分布調査	1992.06・07・12	刻印石2石、関連石材1石を確認。	刻印石2石、石材1石	刻印石は現地保存	〔古川編2003〕では岩ヶ平刻印群第4次調査としている。
11	六麓荘町79	工事立会	1992.09・10	刻印石を2石確認。	刻印石2石	現地保存	〔古川編2003〕では岩ヶ平刻印群第5次調査としている。
12	六麓荘町	確認調査	1993.06	現表土直下で基盤層を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
13	六麓荘町94	確認調査	1993.07~08	1993.06に分布調査。1993.07~08に確認調査を実施し、刻印石1石、石材27石を確認。	刻印石1石、石材27石	-	〔森岡・白谷編1994〕 〔古川編2003〕では岩ヶ平刻印群第6次調査としている。
14	六麓荘町86他	工事立会	1993.09	刻印石2石が破壊されていることを確認。	刻印石2石	消滅	-
15	六麓荘町3,5	工事立会	1993.01	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
16	六麓荘町180	工事立会	1994.01	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
17	六麓荘町2	工事立会	1994.04	刻印石2石の移動立会。	刻印石2石	移設保存	-
18	六麓荘町37-1	工事立会	1994.07	石材1石を庭部分に保存。	石材1石	現地保存	-
19	六麓荘町78	分布調査	1994.05	刻印石2石の保存状況を確認。	刻印石2石	現地保存	-
20	朝日ヶ丘町9	工事立会	1994.06	現地表下30cmで、近現代の盛土層を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
21	六麓荘町6-1,7	分布調査	1994.08	東六甲採石場に伴う石材7石を確認。その後、1994.10・11、1995.01に工事立会を行い、石材1石を確認。	石材8石	-	-
22	六麓荘町65-2~164-1	-	1994.11	-	-	-	-
23	六麓荘町38他	確認調査	1995.05	刻印石1石、関連石材1石を確認し、保存。	刻印石1石、石材1石	現地保存	-
24	六麓荘町3-138	確認調査・分布調査	1995.07	採石場関係石材を1石確認し、保存する。	石材1石	現地保存	-
25	六麓荘町60他	工事立会	1995.09	刻印石に損傷がないことを確認。	刻印石1石	現地保存	-
26	六麓荘町88,89他	工事立会	1995.12	刻印石に損傷がないことを確認。	刻印石1石	現地保存	-
27	六麓荘町34	工事立会	1996.01	-	-	-	-
28	六麓荘町3	分布調査	1996.07	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
29	剣谷町7-1	分布調査	1996.08	段丘礫層を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
30	六麓荘町78	確認調査	1997.01	現地表下100cmまで掘削。基盤層を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
31	六麓荘町33-4	工事立会	1997.02	-	-	-	-
32	六麓荘町76-4	本発掘調査	1997.06	1997.05に確認調査を実施し、刻印石3石を確認。その後、本発掘調査を実施。3石を現地に保存し、1石のみ刻印部分を割り取り、保存した。	刻印石3石	現地保存(割取)	〔森岡・竹村編2006〕 〔古川編2003〕では岩ヶ平刻印群第7次調査としている。
33	六麓荘町39-1	本発掘調査	1997.07~08	1997.05に確認調査を実施。その後の本発掘調査で刻印石2石、関連石材7石を検出。刻印部分を割り取り若宮街かどひろばに移設保存。	刻印石2石、石材7石	刻印部分を割り取り、若宮街かどひろばに移設保存。	〔森岡・竹村編2006〕 〔古川編2003〕では岩ヶ平刻印群第8次調査としている。

第3表 徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群調査地点一覧表(2)

(2005年12月31日現在)

調査地点	所在地	調査種別	調査年月	調査所見	石材・遺構	保存状況	文献・備考
34	六麓荘町24-1	確認調査	1997.07	地表面の分布調査を行う。石垣に転用された石材1石を確認。	石材1石	-	-
35	六麓荘町76-3	確認調査	1997.07	現地地下51cmまで掘削。盛土と基盤層を確認。刻印石1石を確認。	刻印石1石	現地保存	-
36	六麓荘町24-2	確認調査	1997.07	現地地下35cmまで掘削。盛土のみ確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
37	六麓荘町156-9・10・13	工事立会	1997.07	-	-	-	-
38	六麓荘町104-5	確認調査	1997.01	現地地下20cmで基盤層に達した。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
39	六麓荘町4-1	確認調査	1997.01	現地地下150cmまで掘削。盛土のみ確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
40	六麓荘町194、196	確認調査	1997.01	刻印石1石、石材1石を確認。	刻印石1石、 石材1石	現地保存	-
41	六麓荘町1-3先～70-1先	工事立会	1998.02	道路地中管埋設工事に伴う試掘トレンチ18ヶ所について立会。各トレンチを深さ約120cm掘削したが、埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
42	劔谷	分布調査	1998.04	採石場関連の石材1石を確認した。	石材1石	-	-
43	六麓荘町104-1～4	工事立会	1998.07	石垣に矢穴列設定の下取り線をもつ石材を1石確認した。	石材1石	現地保存	-
44	岩園町80-3	確認調査	1999.01	現地地下30cmまで掘削。攪乱を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
45	六麓荘町24-3	本発掘調査	1999.04～05	1999.01に確認調査。刻印石1石を確認。本発掘調査を実施。	刻印石1石	刻印部分を 割り取り、 現地に保存。	〔森岡・竹村編2006〕 〔古川編2003〕では 岩ヶ平刻印群第9次 調査としている。
46	六麓荘町83	本発掘調査	1999.10～11	刻印石7石、石材多数、採石土坑2基を検出。	刻印石7石、 石材多数、採 石土坑2基	刻印石2石 と石材の一 部を石垣内 に保存。他 は現地に埋 没保存。	〔古川編2003〕では 岩ヶ平刻印群第10次 調査としている。
47	朝日ヶ丘町18	確認調査	1999.09	現地地下250cmまで掘削。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
48	朝日ヶ丘町14-1・2	確認調査	1999.01	-	-	-	-
49	六麓荘町115-1・6	慎重工事	1999年度	-	-	-	-
50	六麓荘町88他	工事立会	1999.01	-	-	-	-
51	六麓荘町137-2	確認調査	2000.05	現地地下50cmまで掘削。矢穴石3石、割石2石を確認。	石材5石	現状保存	-
52	六麓荘町136	-	2000.05	-	-	-	-
53	六麓荘町153	工事立会	2000.05	-	-	-	-
54	六麓荘町153-2・4・5、154	工事立会	2000.06	現地地下150cmまで掘削。現地地下100cmで基盤層を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
55	岩園町100、94-2	工事立会	2000.06	現地地下30cm掘削時に立会。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
56	朝日ヶ丘町14-7の各一部	工事立会	2000.07	現地地下120cmまで掘削。基盤層のみで埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
57	岩園町59	確認調査	2000.07	現地地下30cmまで掘削。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
58	六麓荘町153-3	工事立会	2001.01	現地地下30cmまでの土層を確認。盛土のみ。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
59	六麓荘町74-1・4	本発掘調査	2001.04～06	2001.01の確認調査後、本発掘調査を実施。刻印石2石、採石土坑2基を検出。	刻印石2石、 採石土坑2基	現地保存	〔古川編2002・2003〕 では岩ヶ平刻印群第 11次調査としている。
60	朝日ヶ丘町14-6	確認調査	2000.07	現地地下210cmまで掘削。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
61	六麓荘町5、5-1	-	2001.06	-	-	-	-
62	劔谷町27	工事立会	2001.06・07	基礎掘削中に立会。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
63	岩園町96-2	慎重工事	2001年度	-	-	-	-
64	岩園町84先外	工事立会	2001.09	-	-	-	-

第4表 徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群調査地点一覧表(3)

(2005年12月31日現在)

調査地点	所在地	調査種別	調査年月	調査所見	石材・遺構	保存状況	文献・備考
65	六麓荘町119	確認調査	2001.12	現地地表下200cmまで掘削。盛土・基盤層を確認。敷地北側で割石1石を確認。	石材1石	現地保存	-
66	字剣谷	本発掘調査	2002.01~04	刻印石1石、石材多数、採石土坑、掘立柱建物跡、鍛冶炉跡2基を検出。	刻印石1石、石材多数、採石土坑、掘立柱建物跡、炉跡2基	現地保存	〔古川編2003〕では岩ヶ平刻印群第12次調査としている。
67	六麓荘町138-1、139-2	本発掘調査	2002.04~05	2002.01に分布調査を実施後、本発掘調査。刻印石1石、石材15石を確認。	刻印石1石、石材15石	現地保存	〔森岡・竹村編2006〕〔古川編2003〕では岩ヶ平刻印群第13次調査としている。
68	六麓荘町70-2	確認調査	2002.04	現地地表下80cmまで掘削。深度13cm程度で山土を確認。南へ傾斜する地形を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
69	岩園町128-12	工事立会	2002.05	掘削なし。現状では礫などがみあたらない更地であった。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
70	岩園町57-2	第2次確認調査	2003.01・08	2002.05実施の確認調査では、近世の用水路を確認。用水路内から須恵器杯身片が出土。2003.01実施の第2次確認調査では、刻印石1石、石材7石を検出。2003.08に刻印石を実施。	刻印石1石、石材7石	刻印石は現地に移設保存	〔森岡・竹村編2006〕〔古川編2003〕では岩ヶ平刻印群第14次調査としている。
71	岩園町141-2、145-1	確認調査	2002.06	現地地表下70cmまで掘削。現地地表下25cmで山土を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
72	六麓荘町156-9他	分布調査	2002.08・11、2004.01	2002.08の分布調査で割石1石と古墳状隆起1ヶ所が確認され、2002.11に確認調査を実施した。2004.01に立会を実施。	石材1石	現地保存	-
73	岩園町128-2~4、129-2~3	工事立会	2002.01	工事掘削中に立会。現地地表下20cmまで掘削。盛土のみ確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
74	岩園町128-4	工事立会	2002.11	ガス管理設工事中に立会。現表土、攪乱土、基盤層のみ確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
75	岩園町128-17の一部	慎重工事	2002年度	-	-	-	-
76	岩園町128-17の一部、128-19	工事立会	2003.01	基礎掘削中に立会。現地地表から30cm程度掘削で、盛土のみ確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
77	岩園町80-3	工事立会	2003.05	掘削深度50cm程度。現地地表下30cmで基盤層を検出。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
78	岩園町128-18の一部	慎重工事	2002年度	-	-	-	-
79	六麓荘町96	第2次確認調査	2003.06	2003.04の確認調査で刻印石1石を確認。その後、第2次確認調査を実施。	刻印石1石	現地保存	〔森岡・竹村編2006〕
80	岩園町24-1、25の各一部、26-2	分布調査	2003.06	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
81	六麓荘町95-3・6	本発掘調査	2003.06~07	2003.05に確認調査を実施。その後、本発掘調査を実施し、石材9石を検出。	石材9石	石材の大半を埋没保存	〔森岡・竹村編2006〕
82	六麓荘町153-6~8	慎重工事	2003年度	-	-	-	-
83	岩園町102-1の一部	慎重工事	2003年度	-	-	-	-
84	岩園町5他24筆	本発掘調査	2004.05~10	刻印石5石、石材多数、採石土坑、石曳道、炉跡などを検出。	刻印石5石、石材多数、採石土坑、石曳道、炉跡など	現地の公園に刻印石2石、石材8石を移設保存。刻印石3石は三条事務所保管。	〔森岡・坂田編2005〕
85	六麓荘町139-1外7筆	本発掘調査	2004.03~09	刻印石3石、石材39石を検出。	刻印石3石、石材39石	刻印石を割り取り、現地の公園に移設保存。	〔竹村・白谷2004・2005〕
86	岩園町70-1・3・4の各一部	工事立会	2003.01	既存建物に使用されていた石材の1石に転用されていた採石場関連石材(50cm程度の大きさ)が確認された。	石材1石	消滅	-

第5表 徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群調査地点一覧表(4)

(2005年12月31日現在)

調査地点	所在地	調査種別	調査年月	調査所見	石材・遺構	保存状況	文献・備考
87	六麓荘町168	確認調査	2003.01	現地表下100cmまで掘削。敷地内に割石が1石あるが、現状保存されることを確認。	石材1石	現地保存	-
88	岩園町101-3、102-1、101-2の一部、102-2・3の各一部	確認調査	2004.01	現地表下85cmまで掘削。深度15cmより灰黄色砂質土、深度60cmより大阪層群を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
89	岩園町143	確認調査	2004.02	現地表下28cmまで掘削。盛土のみ確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
90	朝日ヶ丘町13-2～5の一部	工事立会	2004.04	現地表下130cmまで掘削。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
91	六麓荘町168-2	確認調査	2004.05	関連石材6石と採石土坑1基を確認。	石材6石、採石土坑1基	消滅	[森岡・竹村編2006]
92	朝日ヶ丘町13-6・7	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
93	六麓荘町167	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
94	岩園町102-8	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
95	岩園町102-1・4	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
96	岩園町24-10、25-3	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
97	六麓荘町32-2	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
98	岩園町26-10	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
99	岩園町24-7、26-8	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
100	岩園町24-14、25-5	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
101	朝日ヶ丘町13-1・7の各一部、13-8	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
102	朝日ヶ丘町13-2・7の各一部、13-6	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
103	朝日ヶ丘町13-3・5の各一部、13-4	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
104	朝日ヶ丘町13-1・2・3・5の各一部	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
105	六麓荘町139-3	確認調査	2004.11	現地表下200cmまで掘削。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
106	六麓荘町3	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
107	岩園町145-2、146	工事立会	2005.05	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
108	六麓荘町115-3・5・7	確認調査	2005.02・07	割石1石を確認した。	石材1石	消滅	-
109	六麓荘町22-1	工事立会	2005.08	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
110	六麓荘町117-1・2	確認調査	2005.06	現地表面で、原位置を保っていない割石3石を確認した。	石材3石	現地保存	-
111	岩園町130	慎重工事	2005年度	-	-	-	-
112	岩園町24-3、26-2・12・13	慎重工事	2005年度	-	-	-	-
113	六麓荘町167	工事立会	2005.08	掘削中に立会い、割石3石を確認した。	割石3石	消滅	-
114	六麓荘町35	確認調査	2005.09	現地表下120cmまで掘削。現地表下34cmで遺構面。矢穴痕を伴う割石を1石確認した。	石材1石	消滅	-
115	六麓荘町159-2	確認調査	2005.08～09	現地表下260cmまで掘削。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
116	六麓荘町24-4	慎重工事	2005.09	-	-	-	-
117	六麓荘町161	慎重工事	2005.01	-	-	-	-
118	岩園町81	慎重工事	2005年度	-	-	-	-
119	岩園町82	確認調査	2005年度	2006年に確認調査実施予定。	-	-	-
120	岩園町130	慎重工事	2005年度	-	-	-	-
121	岩園町24-12	慎重工事	2005年度	-	-	-	-

第6表 八十塚古墳群調査地点一覧表(1)

(2005年12月31日現在)

調査地点	所在地	調査種別	調査年月	調査所見	古墳・石材	保存状況	文献・備考
1	六麓荘町176	本発掘調査	1956.05	土取り作業中に陶棺片が出土し、緊急調査。	岩ヶ平1号墳	現状保存	[村川1966、勇・藤岡1976]
2	六麓荘町176	本発掘調査	1959.04	岩ヶ平1～3号墳の石室を調査。	岩ヶ平1～3号墳	現状保存	[村川1966、勇・藤岡1976]
3	六麓荘町176	未調査	-	岩ヶ平4号墳が存在している。	岩ヶ平4号墳	現状保存	[村川1966、森岡・古川編1979]
4	六麓荘町55	本発掘調査	1959.06	劔谷1号墳の石室を調査。	劔谷1号墳	埋没保存	[勇・藤岡1976]
5	六麓荘町174-3	本発掘調査	1960.10	岩ヶ平5号墳の石室を調査。	岩ヶ平5号墳	埋没保存	[藤岡1967]
6	朝日ヶ丘町1	本発掘調査	1964.08	朝日ヶ丘1・2号墳の石室を調査。	朝日ヶ丘1・2号墳	消滅	[村川1966、勇・藤岡1976]
7	六麓荘町163	未調査	-	岩ヶ平9号墳が存在。1970年に開発された。	岩ヶ平9号墳	不明	[森岡・古川編1979]
8	岩園町53	測量調査	1972.08	岩ヶ平14号墳を測量。	岩ヶ平14号墳	現状保存	[森岡・古川編1979]
9	岩園町53	測量調査	1972.10	岩ヶ平13号墳を測量。	岩ヶ平13号墳	現状保存	[森岡・古川編1979]
10	岩園町41	未調査	-	岩ヶ平10号墳が存在。	岩ヶ平10号墳	現状保存	[森岡・古川編1979]
11	岩園町40	未調査	-	岩ヶ平11号墳が存在。1973年に開発された。	岩ヶ平11号墳	消滅	[森岡・古川編1979]
12	六麓荘町181	本発掘調査	1973	岩ヶ平15号墳の石室を調査。	岩ヶ平15号墳	埋没保存	[森岡・古川編1979]
13	岩園町49	測量調査	1974.05	岩ヶ平12号墳を測量。	岩ヶ平12号墳	現状保存	[森岡・古川編1979]
14	六麓荘町174	測量調査	1978.06	岩ヶ平6・7・8・19号墳を測量。	岩ヶ平6・7・8・19号墳	現状保存	[森岡・古川編1979]
15	岩園町8	未調査	-	岩ヶ平16号墳が存在。	岩ヶ平16号墳	現状保存	[森岡・古川編1979]
16	岩園町9	未調査	-	岩ヶ平17号墳が存在。	岩ヶ平17号墳	現状保存	[森岡・古川編1979]
17	岩園町50.51	未調査	-	岩ヶ平18号墳が存在。	岩ヶ平18号墳	現状保存	[森岡・古川編1979]
18	岩園町65	未調査	-	岩ヶ平20号墳が存在。	岩ヶ平20号墳	現状保存	[森岡・古川編1979]
19	岩園町39	未調査	-	岩ヶ平21号墳が存在。	岩ヶ平21号墳	現状保存	[森岡・古川編1979]
20	六麓荘町174	本発掘調査	1980.02～03・07～09	岩ヶ平6・7・8・26号墳の石室を調査。	岩ヶ平6・7・8・26号墳	埋没保存	[森岡1982 a、1986 f、藤岡・森岡1986 a]
21	六麓荘町181-10	本発掘調査	1980.12～1981.02	岩ヶ平28号墳の石室を調査。	岩ヶ平28号墳	埋没保存	[森岡1982 b、藤岡・森岡1986 b]
22	六麓荘町174	本発掘調査	1981.10・12、1982.01・02～03・04・07～09・10	1～7次にわたる発掘調査。岩ヶ平19・23・24・29号墳の石室を調査。25・27・30号墳は古墳でないことを確認。	岩ヶ平19・23・24・25・27・29・30号墳	29号墳は消滅。19・23・24号墳は埋没保存。25・27・30号墳は非古墳。	[森岡1984、藤岡1985、藤岡・森岡1986 c、森岡編1983]
23	六麓荘町23	工事立会	1981.08	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	[森岡1986 g]
24	六麓荘町10-11	工事立会	1981.09	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	[森岡1986 g]
25	六麓荘町100	確認調査	1982.07	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	[森岡1986 g]
26	六麓荘町10-3	工事立会	1982.01	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	[森岡1986 g]
27	六麓荘町10-7	工事立会	1982.11	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	[森岡1986 g]
28	六麓荘町181	本発掘調査	1984.07～08	1983.03に確認調査を実施し、その後、岩ヶ平22号墳の石室を調査。	岩ヶ平22号墳	現状保存	[藤岡・勇1986、藤岡1987]
29	六麓荘町13	工事立会	1983.06	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	[森岡1986 b]
30	六麓荘町168	工事立会	1983.07	地形変化が著しく、埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	[森岡1986 a]
31	六麓荘町143-1	工事立会	1983.07	浅い基礎であったため、埋蔵文化財の確認には至らなかった。	-	-	[森岡1986 c]
32	六麓荘町190-2	工事立会	1983.08	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	[森岡1986 d]
33	六麓荘町80-1、81、84、85	工事立会	1984.02	巨岩層確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	[森岡1986 e]
34	六麓荘町156-2	確認調査	1984.06	岩ヶ平33号墳が古墳でないことを確認。	岩ヶ平33号墳	33号墳は非古墳。	[森岡1987 a]

第7表 八十塚古墳群調査地点一覧表(2)

(2005年12月31日現在)

調査地点	所在地	調査種別	調査年月	調査所見	古墳・石材	保存状況	文献・備考
35	六麓荘町99	確認調査	1984.06・09	岩ヶ平43号墳が古墳でないことを確認。刻印石2石を含む徳川大坂城東六甲採石場関連の石材を確認した。	岩ヶ平43号墳、刻印石2石	43号墳は非古墳。刻印石は1石が埋没保存、1石が芦屋市立美術館に移送保存。	〔森岡1987b〕〔古川編2003〕では岩ヶ平刻印群1次調査としている。
36	六麓荘町48-1	確認調査	1984.08	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	〔森岡1987c〕
37	六麓荘町128	確認調査	1985.02	砂礫層と流石確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	〔森岡1987d〕
38	六麓荘町79	確認調査	1985.05	岩ヶ平44号墳が古墳でないことを確認。	岩ヶ平44号墳	44号墳は非古墳。	〔森岡1988a〕
39	劔谷7	工事立会	1985.06	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	〔森岡1988b〕
40	六麓荘町155-11	確認調査	1985.06	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	〔森岡1988c〕
41	六麓荘町55-1、16-4	確認調査	1985.07	埋没保存されている劔谷1号墳に影響がないことを確認した。	劔谷1号墳	埋没保存	〔森岡1988d〕
42	六麓荘町107	確認調査	1985.09・11	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	〔森岡1988e〕
43	六麓荘町180、187	確認調査	1985.01	すでに宅地造成が行われており、埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	〔森岡1988f〕
44	六麓荘町171	確認調査	1985.07～08	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	〔藤岡1988〕
45	六麓荘町150-1～4	確認調査	1986.02	敷地南半部には埋蔵文化財がないと判断された。	-	-	〔森岡1988h〕
46	岩園町44、45	確認調査	1987.02	水田層、洪積段丘を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
47	岩園町40-1、41-1	確認調査	1988.02～03	岩ヶ平10号墳の損壊確認調査。徳川大坂城東六甲採石場に伴う石材と採石土坑を確認。	岩ヶ平10号墳、石材、採石土坑	現状保存	〔古川編1990〕
48	六麓荘町195、197	確認調査	1988.11	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
49	六麓荘町170-2～4	確認調査	1989.07～09	岩ヶ平45～49号墳、刻印石1石を確認。	岩ヶ平45～49号墳、刻印石1石	現状保存	-
50	六麓荘町147-1	確認調査	1990.02	基盤層を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
51	六麓荘町120、121	本発掘調査	1991.08～11	1990.07・11～1991.01に分布調査を実施。岩ヶ平50号墳を確認。刻印石2石、割石2石、採石土坑2基を確認。その後、本発掘調査を実施。	岩ヶ平50号墳、刻印石2石、割石2石、採石土坑2基	50号墳は埋没保存。刻印石は分割して現地保存。	〔森岡・白谷編1992〕〔古川編2003〕では岩ヶ平刻印群第3次調査としている。
52	岩園町40-1	確認調査	1990.07	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
53	六麓荘町80-1他	工事立会	1993.08	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
54	六麓荘町177	本発掘調査	1994.06～09	岩ヶ平52～56号墳、採石場関連石材1石を検出。	岩ヶ平52～56号墳、石材1石	55・56号墳の石室石材を朝日ヶ丘集会所敷地に保管。	〔網干・米田・竹村・太田・海邊編2002〕
55	六麓荘町6-8	確認調査	1994.09	基盤層中に巨石塊を浅い位置で確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
56	六麓荘町115-2	確認調査	1994.11	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
57	岩園町40-1、41-1	工事立会	1995.07	土盛状態が設計図2mの3倍、6mになっていることを確認。	岩ヶ平10号墳	現状保存	-
58	六麓荘町183-7	工事立会	1995.09	現地地表下40cmまで掘削。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
59	六麓荘町137-1、138	確認調査	1995.09	現地地表下100cmで基盤層を検出。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
60	六麓荘町139-1	工事立会	1996.02	現地地表下20cmまで掘削。腐植土層のみ確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
61	六麓荘町16-3	工事立会	1996.06	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
62	岩園町65	工事立会	1996.06	古墳の兆候のある部分での工事は認められなかった。	-	-	-
63	六麓荘町162、163-2	確認調査	1996.11	復興支援調査。近現代以前の遺構を検出。	-	-	-

第8表 八十塚古墳群調査地点一覧表(3)

(2005年12月31日現在)

調査地点	所在地	調査種別	調査年月	調査所見	古墳・石材	保存状況	文献・備考
64	六麓荘町181-11・14	確認調査	1996.06	現表土と花崗岩塊を含む山土を確認。北東から南西に向かって花崗岩塊が散乱。谷地形を反映している。	-	-	-
65	六麓荘町169	確認調査	1996.06	現地地下60~80cmまで盛土と基礎。既存建物によって削平が行われている。	-	-	-
66	六麓荘町156-5	工事立会・分布調査	1996.07	既設家屋部分の平坦地から南西急斜面にかけて、石材散布などを中心に表面調査。とくに石室の兆候はなし。	-	-	-
67	六麓荘町98	分布調査	1996.07	現地地下113cmまで掘削。盛土・流土・基盤層を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
68	六麓荘町120,121	本発掘調査	1998.04~05	埋没保存されていた岩ヶ平50号墳を発掘調査により、記録保存。刻印石1石は埋没保存。	岩ヶ平50号墳、刻印石2石	50号墳は消滅。刻印石1石を埋没保存。	[森岡・竹村2005]
69	六麓荘町166-5-6	確認調査	1997.12	現地地下45cmまで盛土を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
70	六麓荘町117~141	確認調査	1998.05	埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
71	岩園町63	工事立会	1998.12	現地地下40cmまで掘削。盛土のみ確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
72	岩園町57-1	確認調査	1999.02	現地地下120cmまで掘削。60cmの盛土層、10cmの旧耕土層を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
73	六麓荘町181	本発掘調査	1999.12~2000.02	1999.08に確認調査を実施し、埋没保存されていた岩ヶ平22号墳を確認。その後、22号墳を発掘調査し、記録保存した。57号墳が新たに検出され、記録保存した。矢穴石を1石確認。	岩ヶ平22・57号墳、石材1石	22・57号墳は消滅。	-
74	六麓荘町70,70-1	確認調査	2000.01	最深確認深度は現地地下40cm。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
75	六麓荘町154-6~8	確認調査	2000.11	最深確認深度は現地地下125cm。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
76	六麓荘町120,121	工事立会	2000年度	-	-	-	-
77	六麓荘町166-3	確認調査	2001.02	最深確認深度は現地地下75cm。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
78	六麓荘町47-1	確認調査	2001.08	最深確認深度は現地地下40cm。現地地下22cmで基盤層を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
79	岩園町65先外	工事立会	2001年度	-	-	-	-
80	岩園町29-5,30-6	確認調査	2001.11	現地地下170cmまで掘削。盛土のみ確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
81	六麓荘町183-2	確認調査	2002.01	深さ50cmまで掘削。深さ45cmより段丘礫層を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
82	岩園町30-5	慎重工事	2001年度	-	-	-	-
83	岩園町53先	工事立会	2002年度	-	-	-	-
84	六麓荘町147-1の一部、147-2	確認調査	2002.10	最深確認深度は現地地下50cm。深さ35cmで暗黄色礫まじり粘質土層を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
85	六麓荘町181	慎重工事	2002年度	-	-	-	-
86	岩園町52-1	確認調査	2002.11	現地地下77cmまで掘削。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
87	岩園町42-2,43-2	確認調査	2003.03	最深確認深度は現地地下150cm。盛土及び黄色砂質土層を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。2003.07、基礎掘削中に立会。現地地下200cmほど掘削。盛土のみ確認。	-	-	-
88	岩園町70-1の一部	確認調査	2003.07	最深確認深度は現地地下135cm。現地地下50cm以下から近世以前の堆積土。現地地下100cm前後で基盤層を検出。埋蔵文化財は確認されなかった。2003.10基礎掘削中に立会。	-	-	-
89	岩園町70の一部	慎重工事	2003年度	-	-	-	-

第9表 八十塚古墳群調査地点一覧表(4)

(2005年12月31日現在)

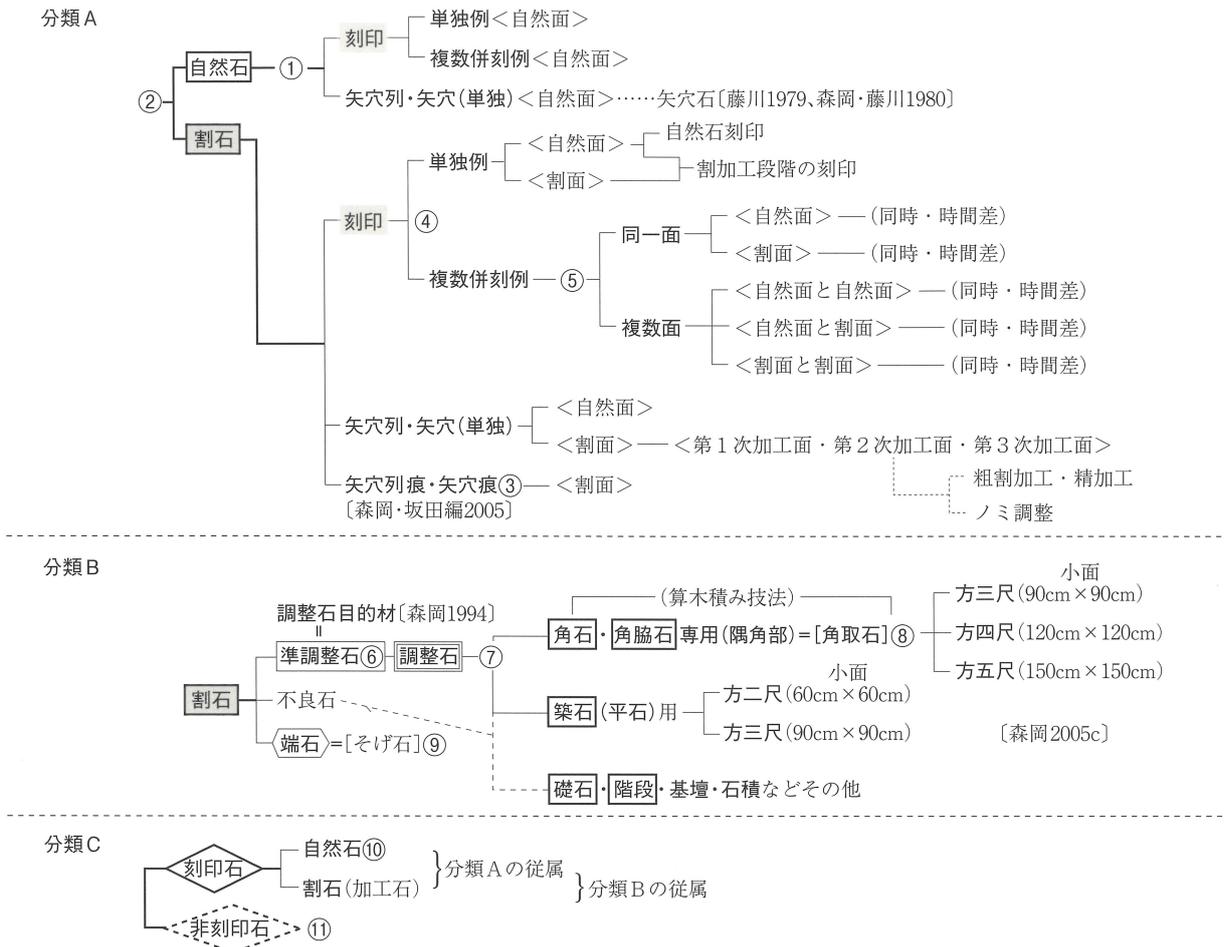
調査地点	所在地	調査種別	調査年月	調査所見	古墳・石材	保存状況	文献・備考
90	岩園町80先	工事立会	2003年度	-	-	-	-
91	六麓荘町99-2	確認調査	2003.01	最深確認深度は現地表下80cm。攪乱土及び基盤層を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
92	岩園町63の一部	工事立会	2003年度	-	-	-	-
93	岩園町63の一部	工事立会	2003年度	-	-	-	-
94	六麓荘町57	慎重工事	2003年度	-	-	-	-
95	岩園町70-1・3・4の一部	慎重工事	2003年度	-	-	-	-
96	六麓荘町10-28	慎重工事	2003年度	-	-	-	-
97	岩園町147-1	慎重工事	2003年度	-	-	-	-
98	六麓荘町178-1	確認調査	2004.03	現地表下80cmまで掘削。深さ30cmで基盤層を確認。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
99	六麓荘町54	確認調査	2004.04	現地表下111cmまで掘削。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
100	六麓荘町166-1・2・4	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
101	六麓荘町170-2~4	分布調査	2004.07	分布調査で古墳を5基(45~49号墳)確認。	岩ヶ平45~49号墳	現状保存	-
102	岩園町70-1、70-3の各一部	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
103	岩園町70-1、70-3の各一部	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
104	六麓荘町199-1・2	慎重工事	2004年度	-	-	-	-
105	岩園町40-1、41-1	確認調査	2005.02~03	埋没保存されている岩ヶ平10号墳を確認。徳川大坂城東六甲採石場に伴う割石9石を確認。	岩ヶ平10号墳、割石9石	10号墳は損壊部分を本発掘調査。石材は埋没保存。	-
106	岩園町40-1、41-1	本発掘調査	2005.04~07	工事により損壊を受ける岩ヶ平10号墳南半部を発掘調査。	岩ヶ平10号墳	古墳北半部は埋没保存。	2006年度に報告書を刊行予定。
107	六麓荘町154-3・4、156-1・17	慎重工事	2005.06	掘削中に立会う。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-
108	六麓荘町170-2~4	本発掘調査	2005.12~2006.02	2005.08~09に確認調査を実施し、周知の岩ヶ平45・46号墳以外に、58号墳を確認。47~49号墳は非古墳。本発掘調査では、これら3基の古墳と刻印石2石、炉跡などを調査。	岩ヶ平45~49・58号墳、刻印石2石、炉跡	岩ヶ平45・46号墳は埋没保存。58号墳は消滅。刻印石は現地保存。47~49号墳は非古墳。	[芦屋市教委2006] 2006年度に報告書を刊行予定。
109	六麓荘町157、158-2	確認調査	2005.09	最深確認深度は現地表下140cm。埋蔵文化財は確認されなかった。	-	-	-



第11図 岩ヶ平刻印群(第45地点)1号石材



第12図 岩ヶ平刻印群(第67地点)石材群



第13図 森岡秀人氏による大坂城築城石の芦屋市域石切丁場関連石材分類試案〔森岡2006〕

森岡・竹村編2006]、今後も、さらに本採石場における採石活動の具体相についての調査・研究を深めるべきである。

なお、採石技術や方法を検討する前提として、まず、採石に伴う遺構や石材について、その概念や用語を整理し、今後の採石場における採石技術の研究にとって共通認識を得られるようにしなければならない。それについては〔森岡・白谷編1994、森岡編1998、古川編2002・2003、芦屋市教委2004、森岡・坂田編2005、森岡・竹村編2006〕など、多くの文献で試みられているが、未だ共通認識を得た用語として定着していないものも多い。本書においても用語の統一は必要と考え、第4章第4節(3)石材の項で若干の概念や用語の整理を試みた。しかし、研究者間の議論が不足しており、今後の課題として敢えて用語の統一には拘らなかった。

ところで、岩ヶ平刻印群においては、発掘調査において検出された刻印石や関連石材について、地権者や事業者の協力を得て保存に努めている。保存の方法については、本来、現状保存が望ましいが、石材が巨石であることが多く、その全体や一部(刻印部分)を移設保存せざるを得ない場合が大半である。今回の調査で検出された石材も、事業者である大和システム株式会社に全面的な協力をいただき、調査地内に建設された公園(六麓荘緑地)に移設保存することができた(第107図、図版66)。

これまでの移設保存の方法は、刻印石を中心として石材を単体として保存するもので、当時の採石状態を良好に残した石材群を一括して保存した例はない。保存場所や安全性の問題が解決できない限り不可能であるが、今後、このような石材群の移設保存についても実現させたい。(竹村)

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理・地質的環境

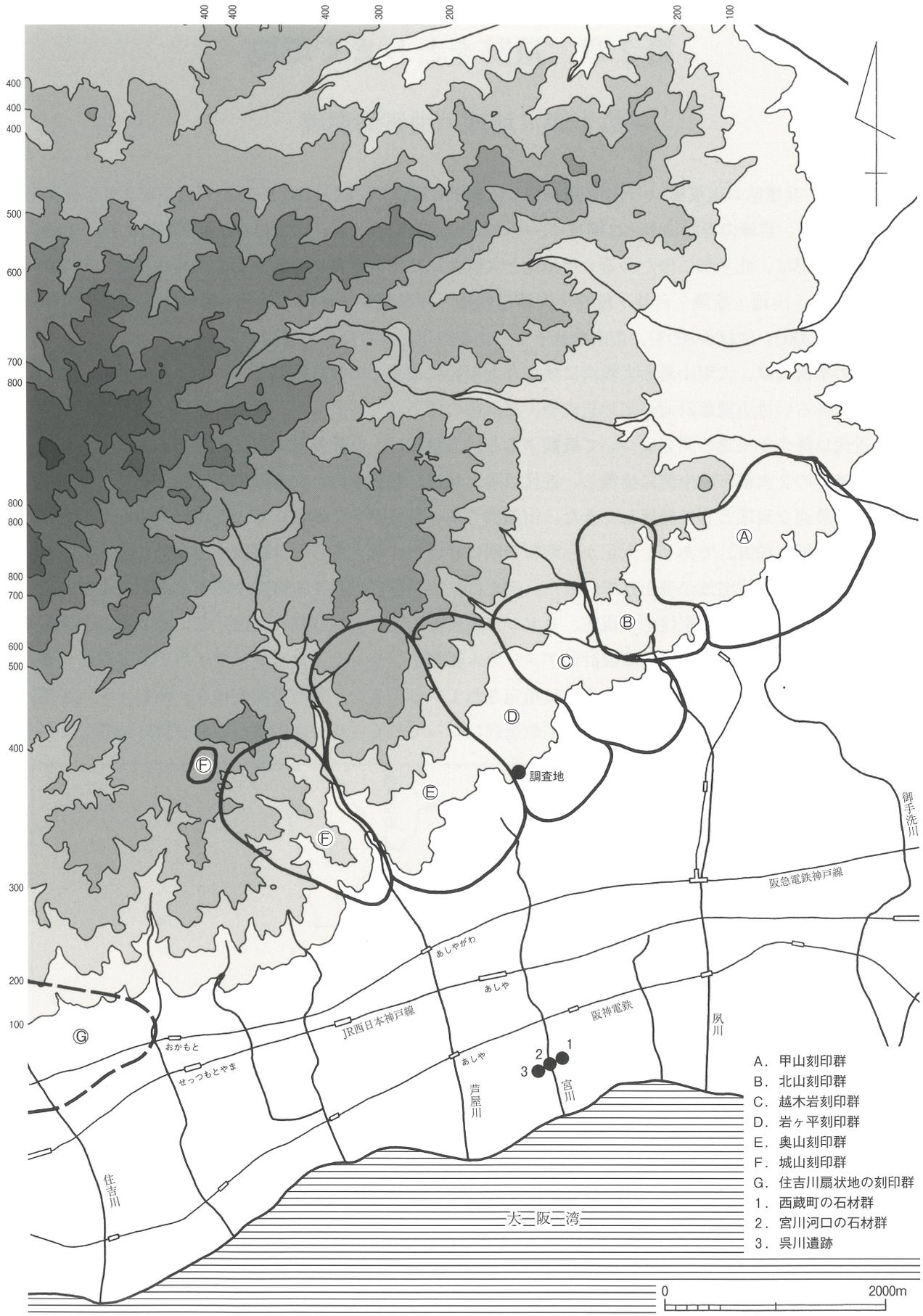
芦屋市は、兵庫県の南東部、いわゆる阪神間に位置する都市で、人口は90,851人（平成18年3月1日現在）となっている。市域の形状は南北に細長く、その規模は東西約2.5km、南北約8.3km、面積18.57km²を測る。

市域の地形は、北半部に横たわる六甲山地と大阪湾に挟まれた地域で北高南低の変化に富んだものとなっており、山地・丘陵・台地・段丘・沖積扇状地・沖積低地・砂州・浜堤・砂浜が形成されている〔辻2002・2003、辻ほか2003〕。市内を流下する主要河川は、芦屋川と宮川である。

現在の市街地は、六甲山地と大阪湾に挟まれた東西に細長くのびる狭隘な平野を中心に展開しているが、山地あるいは山麓部斜面の宅地造成や、海浜部の埋め立てによって、さらに居住域を拡大してきた。この近代以降の住宅地の開発について概観すると、当地域は、気候温暖で自然環境に恵まれている上に、大阪・神戸の2大都市の中間に位置し、近代以降、急速に整備された交通網の充実化と相まって、住宅地として最適な地域として発展してきた。山麓部では、眺望がすこぶる良く、雛壇形式の宅地造成に適した地形〔坂本1997〕であり、大正から昭和初期にかけて、個人あるいは民間土地会社によって高級で、特色ある質の高い住宅地が築かれていった。例えば、山手町に所在する自然や地形と調和する優れた建築物として有名な旧山邑家住宅（現在、ヨドコウ迎賓館）は、大正13年（1924）頃、醸造家山邑太左衛門が建てた別荘であるが、その原設計がアメリカ人建築家フランク・ロイド・ライトであったことから、昭和49年（1974）3月に国の重要文化財に指定されている。また、今回の調査地も、昭和4年（1929）の株式会社六麓荘による数万坪にのぼる宅地造成によってつくられた高級住宅地の一角に位置しており、

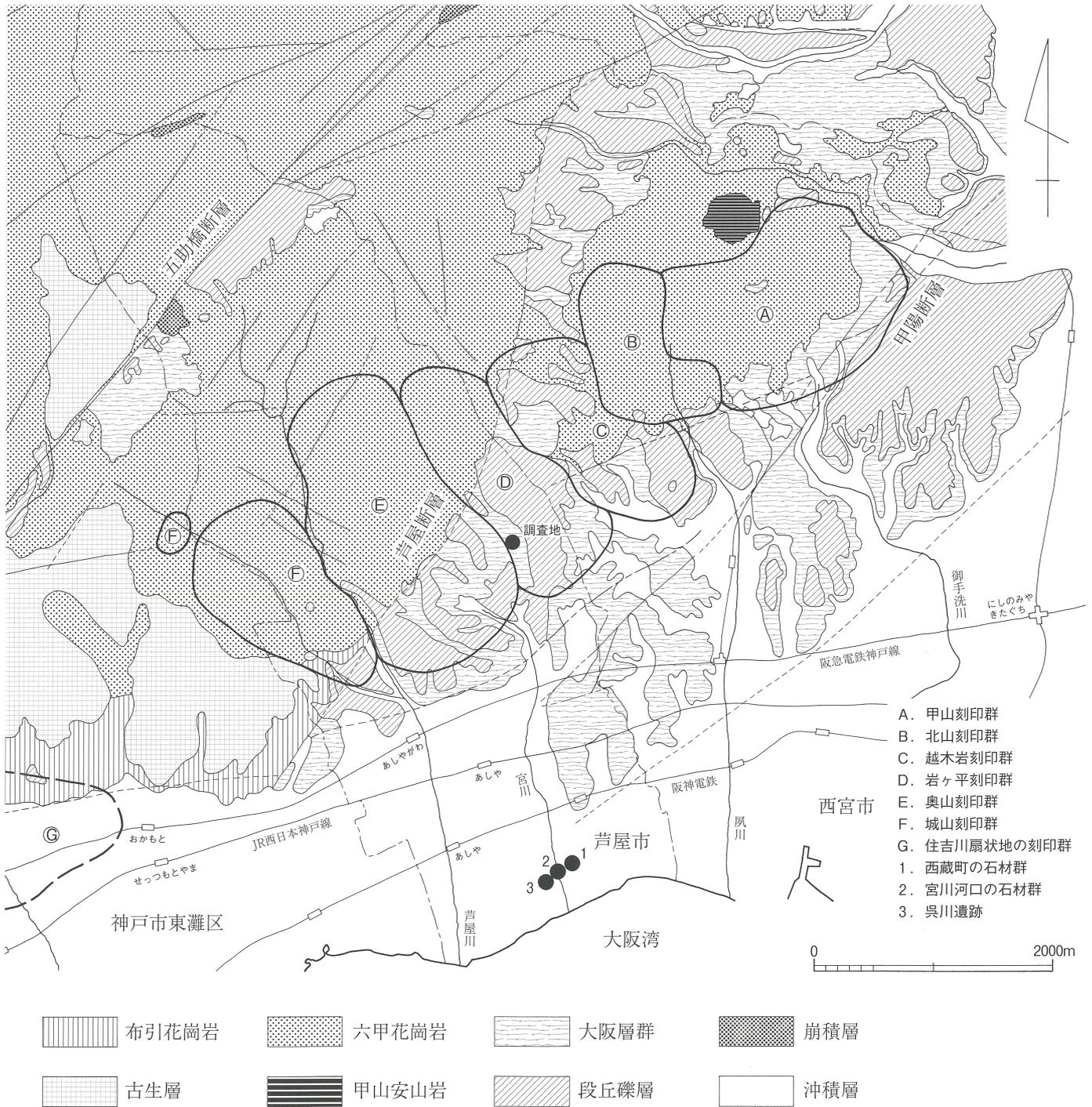


第14図 兵庫県と芦屋市の位置



- A. 甲山刻印群
- B. 北山刻印群
- C. 越木岩刻印群
- D. 岩ヶ平刻印群
- E. 奥山刻印群
- F. 城山刻印群
- G. 住吉川扇状地の刻印群
- 1. 西蔵町の石材群
- 2. 宮川河口の石材群
- 3. 呉川遺跡

第15図 六甲山地東南麓地域の地形と徳川大坂城東六甲採石場各刻印群の分布範囲 1 / 50000



第16図 六甲山地東南麓地域の地質と徳川大坂城東六甲採石場各刻印群の分布範囲 1/50000
 ([古川編2003] から、一部改変)

当該敷地が所在する六麓荘町は現在も高級住宅地としてよく知られている。

ところで、芦屋市を含む六甲山地南麓地域は、上記のとおり平野が狭隘であるがゆえに、古代以前から東西交通の要衝であり、大阪湾の海上交通とも合わせて、経済的、さらには政治的、軍事的にも非常に重要な地域として、時の為政者や政権に重要視されてきた。例えば、会下山遺跡、城山遺跡などの高地性集落の性格の一つとして海上交通の見張り台とする説があり、また、古墳時代の阿保親王塚古墳（前期）、打出小槌古墳（中期）、金津山古墳（中期）、白鳳文化期創建の芦屋廃寺跡は、政権や中央地域の有力氏族と深くかかわりをもった人物や地方氏族が築いたものと推測されている。さらに、文献で

は、建武3年(1336)の打出合戦や観応2年(1351)の打出浜合戦が記録されている。もちろん、現在でもJR神戸線、阪急電鉄神戸線、阪神電鉄本線、国道2号・43号線、阪神高速道路3号神戸線・5号湾岸線と、日本の大動脈が集中しており、阪神・淡路大震災の際には、これらの寸断によって、日本経済全体に深刻な影響を与えたことは記憶に新しい。

今回の調査地は、市域の東部、六甲山地の東南麓丘陵に立地しており、周知の埋蔵文化財である「八十塚古墳群」と「徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群」の範囲内に位置している。本節では、これらの遺跡が大きく関わっている六甲山地の形成過程や地質的環境について説明したい。

六甲山の基盤岩は花崗岩であり、一般には「御影石」の別称の方が親しまれている。六甲山地を形成する花崗岩は単一ではなく、大きくは、山地基盤の大半を構成する六甲花崗岩と芦屋川以西の山麓部に細長く分布する布引花崗閃緑岩に分けられる。また、東お多福山・金鳥山付近では、島状に古生層が分布する。甲山は安山岩で構成されている。

これらの形成過程をみていくと、六甲花崗岩は、中生代白亜紀(8000~9000万年前頃)に地下のマグマ溜りがゆっくりと冷え固まった深成岩である。その後、新生代第三紀鮮新世末期~第四紀更新世前期(100~200万年前)には、現在の大阪平野と大阪湾あたりに出現した古大阪湾の海底に大阪層群が形成される。約100万年前頃からは、東西の圧縮を受け、六甲山地を形成する隆起活動(六甲変動)がはじまり、この山地生成過程において六甲断層系と呼ばれる多くの断層(六甲断層、五助橋断層、芦屋断層、甲陽断層、大槻断層、諏訪山断層、布引断層、渦ヶ森断層、須磨断層など)が生じている。この隆起に際して、大阪層群が引きずられるように上昇した結果、現在では山地高所部でも海成層が断続的に確認できる。およそ15~25万年前頃には段丘礫層が形成されるが、これは山頂付近をはじめ、断層崖として露呈している花崗岩体の節理から風化・浸食がはじまり、やがて崩落や流下が進んで大阪層群の被覆する山地斜面上に再堆積し、さらに段丘化したもので、古い地形面から段差をなくして平野部と接続している。すなわち、当層は古い土石流堆積物であり、層中には二次的に移動した花崗岩塊が多数包含されている。

以上、現在の地質的環境がどのように形成されてきたかを概観したが、これらの中で、特に八十塚古墳群と大坂城東六甲採石場跡に深く関わるのは、段丘礫層である。言うまでもなく、八十塚古墳群では横穴式石室の構築材として段丘礫層中の花崗岩礫を用い、徳川大坂城東六甲採石場跡では同層中の花崗岩の巨礫を対象に採石活動を行っているからである。さらに、徳川大坂城東六甲採石場跡では、六甲山地前山と海岸線までの距離が極めて短いという地の利を活かし、さらに複雑に開析された谷筋を流下する小河川が平野部に入り、芦屋川や宮川、夙川に概ね収束する地形的環境を最大限に利用した採石・運搬システムが展開をみたことが理解できる〔森岡・坂田編2005〕。

なお、六甲山地の地形・地質的環境は、本地域の災害を引き起こす要因であることも確認しておきたい。具体的には、まず、六甲山地の断層活動による巨大地震の発生が挙げられる。また、花崗岩地域は水もちが悪くハゲ山になりやすい上に、風化が進んだ部分は大量の降雨があると大規模な土石流を発生させるのである。

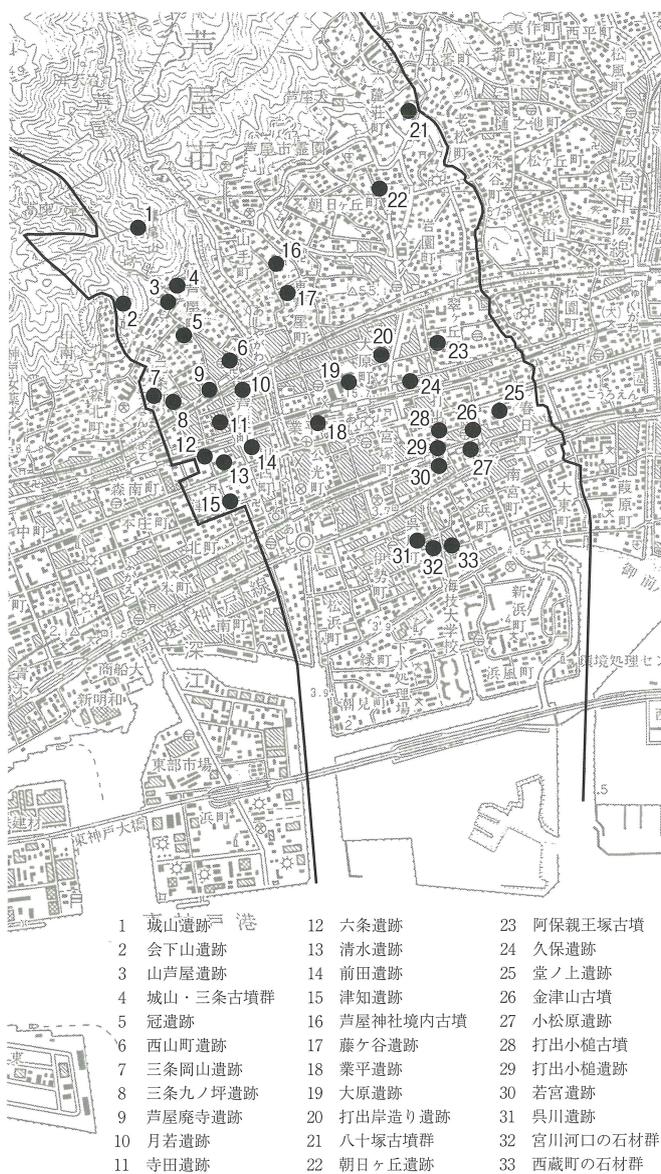
このような地質環境の中で、『大阪西北部地域の地質』〔藤田・笠間1982〕をみると、本調査地は表層地質が大阪層群となっており(第16図)、本発掘調査の結果においても大阪層群が検出され、その上に花崗岩礫が堆積している状況が確認された。(竹村)

第2節 歴史的環境

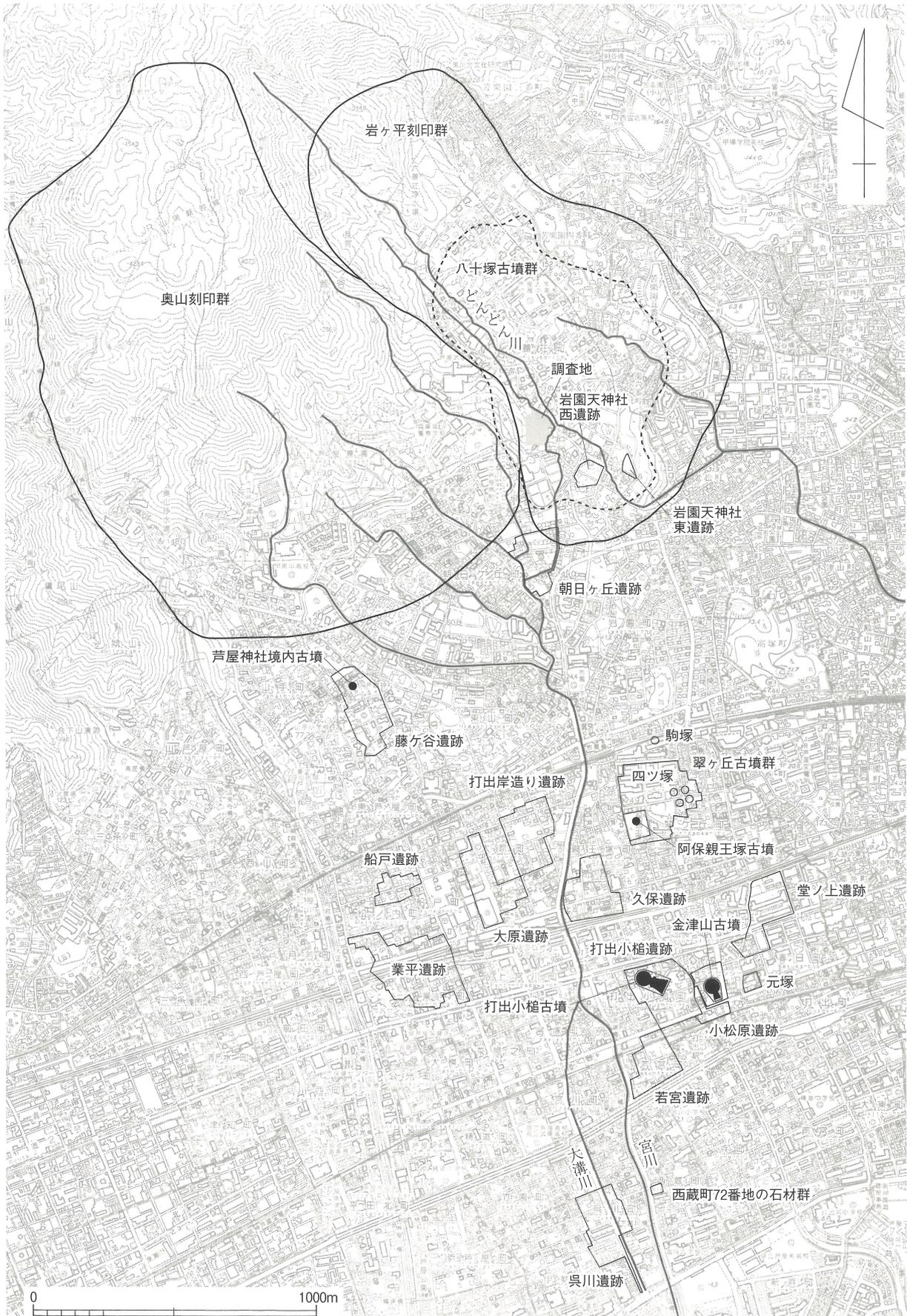
今回発掘調査を実施した岩ヶ平台地・六麓荘台地は、前節で述べたとおり、六甲山南麓のいわゆる中位段丘に相当する傾斜地である。加えて、その基盤層が六甲花崗岩を含む段丘礫層を主体とするため、高燥で水持ちが悪く、水田耕作地としては不向きな土地である。このような地理的制約により、調査地周辺に展開する遺跡は、その年代や性格がかなり限定されている（第17・18図）。

周辺遺跡の中で、最も古く遡る遺跡は、岩ヶ平遺跡（『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図』〔森岡・竹村編2001〕では、「岩園天神社東遺跡」・「岩園天神社西遺跡」と記載）である。吉岡昭作成の『岩ヶ平遺跡地図』（昭和初年）によると、この遺跡では、岩園天神社やその西方において石器やサヌカイト片、土器等が採集されている。石器は、石鏃が最も多く、その他に石包丁・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧・磨製石剣などがあり、チャートや黒曜石製のものも含まれていた。土器については、わずかであるが弥生土器の存在が知られている。このような遺物の内容から、岩ヶ平遺跡は縄文時代～弥生時代の複合遺跡と考えられているが、正式な発掘調査が実施されていないため、実態は不明である〔武藤・有坂・末中・村川編1976、森岡・坂田編2005〕。

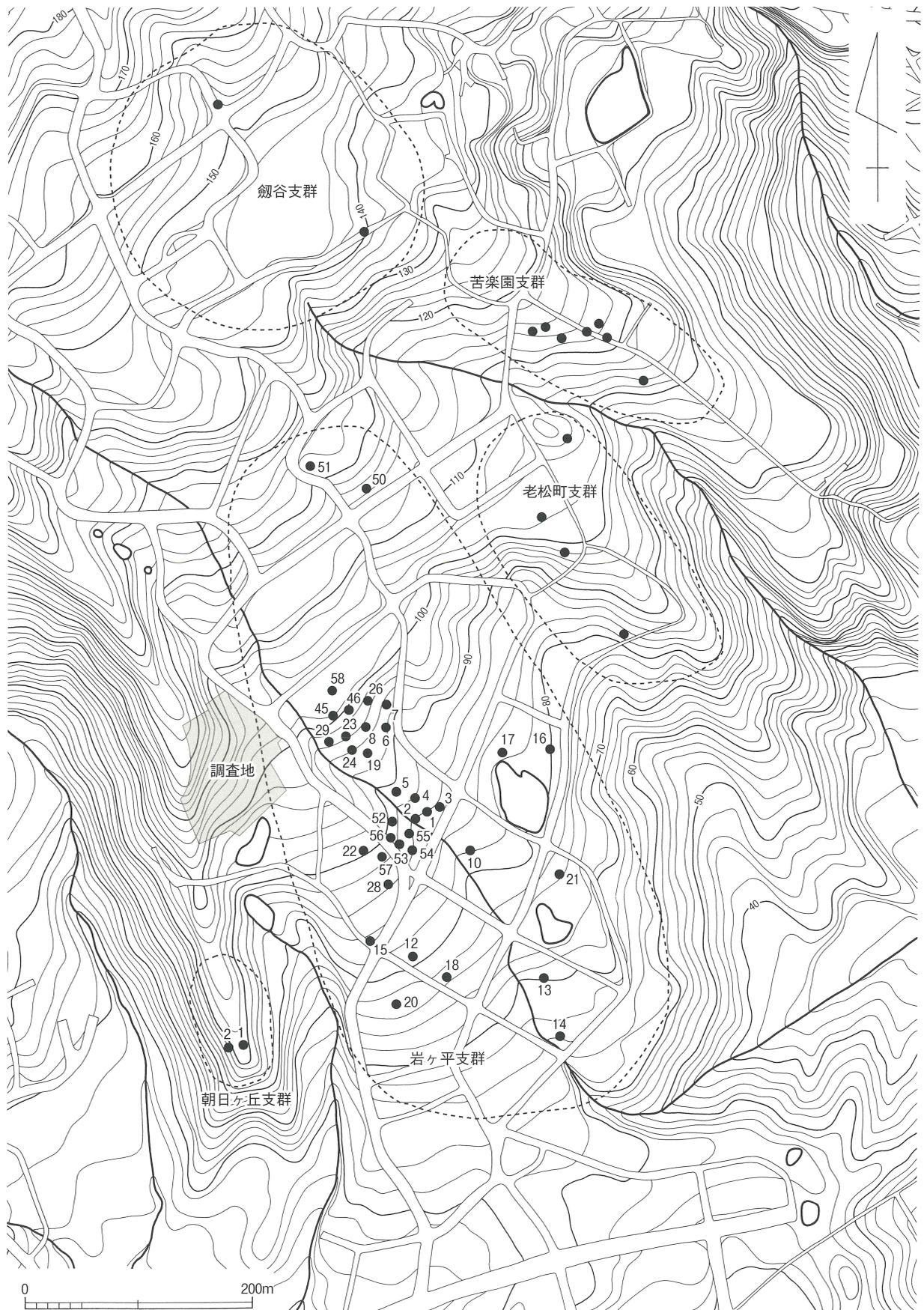
次いで、古墳時代には、この地域は墓域として活用されており、「八十塚古墳群」と呼ばれている。現在60基程の古墳が確認されており、古墳時代後期（6世紀後半）から飛鳥時代（7世紀半ば）に造営された、市内における最大規模の群集墳として知られるとともに、阪神間の都市部に残された数少ない古墳群の一つでもある。八十塚古墳群は、芦屋市六麓荘町・岩園町および西宮市苦楽園4・5・6番町一帯に広がっており、尾根ごとに古墳の密集域が区分できることから、劔谷・苦楽園・老松・岩ヶ平・朝日ヶ丘の5支群が設定されている（第19図）。このうち、岩ヶ平支群は標高65～100m付近に、東西約250m、南北約600mにわたって広がっており、八十塚古墳群の中で最も古墳の密集度の高い支群である。調査地周辺には、地表面や堆積土中に多数の花崗岩巨礫（ボルダー）が存在しており、この花崗岩を用いて古墳の埋葬主体が構築されている。墳丘規模は径10～20m程度で多くは横穴式石室墳であるが、一部、竪穴系の埋



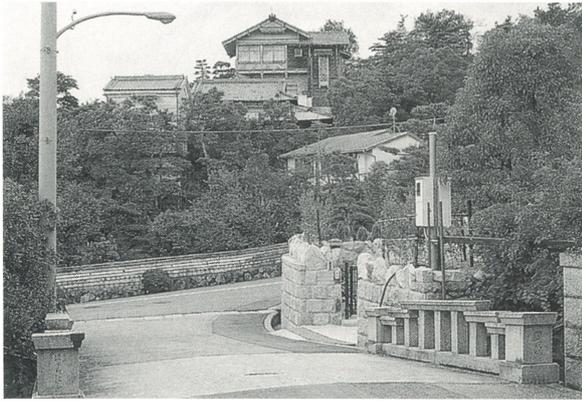
第17図 芦屋市内主要遺跡分布図 1 / 50000



第18図 芦屋市内宮川流域遺跡分布図 1 / 20000



第19図 八十塚古墳群の古墳分布・支群と地形 1 / 5000
〔網干・米田・竹村・太田・海邊編2002〕から、一部改変



第20図 調査地点ととんどん川にかかる石橋
〔芦屋市1990a〕

葬主体を内部構造にもつものも見られる。八十塚古墳群の出土遺物には、須恵器・土師器・耳環・玉類・鉄釘・鉄鏃・紡錘車・陶棺などが見られる。

岩ヶ平支群は南東方向に下る尾根斜面に古墳が築造されている。ちなみに、今回の発掘調査地点の南東側には、夙川の支流である「とんどん川」と宮川へ注ぎ込む谷川とに挟まれた尾根の斜面に、岩ヶ平支群第22・28・52～57号墳の存在が確認され、「岩ヶ平支群H小支群」と呼称されている。また、道路やとんどん川を隔てた東側の尾根の斜面部分には、

岩ヶ平支群23・24・26・29・45・46・58号墳などが集中する「岩ヶ平支群F小支群」が展開している。さらにその南側にも、「岩ヶ平支群E小支群」を構成する古墳が濃密に分布している〔網干・米田・竹村・太田・海邊編2002、森岡・古川編1979、森岡編1983、古川編1990、芦屋市教委2006〕。一方、今回の発掘調査地点の西側には長背尾根が延びており、この尾根の背の最南端部分には朝日ヶ丘支群第1・2号墳が知られている。今のところ、岩ヶ平支群は宮川へ注ぎ込む谷川より東側にその分布域が限られているようであり、今回の調査地点はこの川の西側にあたるが、岩ヶ平支群と朝日ヶ丘支群との古墳の立地状態や、今回の調査地点と周辺古墳の距離を考えると、調査地点に古墳が発見された場合には、岩ヶ平支群を構成するものとみてよいであろう。

八十塚古墳群形成後、徳川大坂城東六甲採石場が登場するまで、岩ヶ平台地・六麓荘台地において遺跡として認識されているものは乏しい。しかし、八十塚古墳群の中に、中世以降、石室が再利用されたものが知られており、人々の生活痕跡が皆無というわけではない。岩ヶ平支群第10号墳は、1987年頃まで南方向に開口していた横穴式石室墳であるが、石室内から13世紀代の瓦器碗や土師質土器小皿が出土しており、石室内が「石室（いしむろ）」として再利用されていた可能性が指摘されている〔古川編1990〕。そのほか、同じく岩ヶ平支群の第1号墳や第23号墳、第28号墳等でも、当該期の瓦器や土師器が出土している〔渡辺1992〕。これらの遺物の出土要因を特定することは難しいが、単なる盗掘以外に密教や修験道の祠として石室が再利用された可能性は十分考えられよう。ちなみに、六甲山中では、芦屋川上流の高座の滝に近い中ノ滝付近の斜面から、瓦器や土師質土器灯明皿が出土する例があり〔森岡1977、田辺・森岡・位原編1979〕、滝壺そのものが「霊場」として機能していたことが知られている。さらに、下草や薪炭を得るための入会山野として利用されていたことも想像に難くない。古代、中世を通じて、岩ヶ平台地・六麓荘台地に明確な集落跡は確認されていないが、居住域から遠く離れた「人煙絶ゆる地」ではなかったことが推察されるのである。

ところで、徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群は、八十塚古墳群と重複するように広がっている。この象徴的な事例として、岩ヶ平支群第10号墳の天井石を挙げることができる〔森岡・古川編1979、古川編1990〕。第10号墳の石室は2005年の宅地造成工事によってすでに消滅したが、1978年頃の記録・写真によると、3石の花崗岩の天井石が架構されており、矢穴によって割られた面を有する石材が含まれている。この割石は、明らかに古墳築造より新しい時代の産物であり、天井石の一部が割り取られているという事象は、東六甲採石場が八十塚古墳群と重複していたために起こったことといえる。ただし、この割石は、徳川大坂城東六甲採石場期のAタイプの矢穴痕だけでなく、より新しいと考えられるCタ

イプの矢穴痕も有しており、Cタイプの矢穴による割面を下にしているのので、天井石を採石の対象として割り取っただけではなく、必要な部分を割り取った残りの端材を天井石として再架構したことがわかるのである。再架構の時期は、Cタイプの矢穴が穿たれた時期以降に下ることは明らかである。ところで、この割石は両側壁に安定した状態で据えられており、石を割った後でたまたま石室状になったというよりも、「石室（いしむろ）」であることに何らかの意味を見出し、意識的に「石室」を再構築したとみることができるものである。

その背景の一つに、近世における山岳信仰や修験道の流行を挙げることができよう。岩ヶ平支群第13・14号墳が境内に遺存している岩園天神社（江戸時代には「岩ヶ平天神社」と呼称）には、第14号墳の上に安政5年（1858）に建てられた役行者の碑があり、当地では大峯山参詣、行者講が盛んであったことが伝えられている〔武藤・有坂・末中・村川編1971〕。このような流行を受けて、改めて第10号墳を「石室」として造り直したことが想定できる。

次に、視線を転じて、調査区から南流した谷川が一流を構成する宮川に着目したい。宮川は、六甲山前山山地や岩ヶ平台地・六麓荘台地に端を発する小河川が合流し、翠ヶ丘台地の西側縁辺部を南流する。右岸には六麓荘台地の南に芦屋台地と呼ばれる丘陵がのび、その下流に沖積扇状地や海岸低地が広がる。一方、左岸に扇状地はほとんど発達せず、翠ヶ丘台地の南側には砂州や海岸低地が展開する。このように宮川流域は左岸と右岸では自然地形が異なるため、流域に点在する遺跡の様相も異なる（第18図）。

六麓荘台地の南西部分には、縄文時代前期の朝日ヶ丘遺跡が知られている。この遺跡からは石鏃・石匙・石斧などの多くの石器とともに、刺突文・条痕文・爪形文などの土器片が出土しており、阪神地区でも代表的な縄文遺跡である。六麓荘台地から幾分南に下がる宮川右岸の芦屋台地には、弥生土器やサヌカイト製の石器が採集された藤ヶ谷遺跡がある。採集資料から弥生時代の遺跡と推定されていたが、2001年の発掘調査によって、さらに、奈良時代の火葬墓が存在していることが確認された〔森岡編2003〕。また、藤ヶ谷遺跡の周辺には、群集墳を形成していた可能性が指摘されている芦屋神社境内古墳も存在している。このように、宮川右岸の台地上には弥生時代以降、人々の足跡が残されている。しかし、古代において、台地上に集落はほとんど展開しなかったと考えられる。

宮川右岸の中流～下流域に広がる扇状地には、東から打出岸造り遺跡、大原遺跡、船戸遺跡、業平遺跡等の存在が知られている。このうち、芦屋川に最も近い業平遺跡では、縄文時代前期や晩期の遺構が確認されており、人々が早くに住み着いたことがわかる。また、当該遺跡では、弥生時代前期の溝や土坑、弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居や掘立柱建物、初期横穴式石室などが検出され、生活域として、あるいは墓域として重層的に活用されていたことがわかる〔安田編2006〕。さらに、業平遺跡より少し北側に位置する船戸遺跡からは、埴輪や平安時代の緑釉陶器・須恵器等が出土しており、当該期の集落が存在している可能性が高まってきている〔芦屋市広報課2003〕。一方、宮川沿いの打出岸造り遺跡では、古墳時代の水路や木製品の出土が知られており、この頃には集落が形成されたと推定される。ところで、芦屋川に近い業平遺跡では古代以後の耕作地が検出されているが、打出岸造り遺跡や大原遺跡の耕地化は中世以後に下るようである。なお、打出岸造り遺跡からは、17～18世紀頃と見られる江戸時代の上水道施設である竹樋が検出されており、農村部でありながら上水道を有する先進的な集落であったことも知られている〔芦屋市教委1991〕。

ここからは、宮川左岸の様相について述べる。翠ヶ丘台地上には、翠ヶ丘古墳群があり、古墳時代前期の阿保親王塚古墳、中期の打出小槌古墳・金津山古墳、後期の打出駒塚古墳などが展開する。これら